

第5回 学習指導 基本調査

小学校・中学校版

ダイジェスト

小学校・中学校の取り組みや、 教員の学習指導の実態、意識は どのように変化しているのでしょうか？

本調査は、2010年8～9月に、
全国の小学校・中学校・高校を対象に
実施したものです。

教育政策や学校をめぐる状況が変化するなか、
学校・教員はどのような意識を持ち、
どのような取り組みを行っているのでしょうか。

このダイジェストでは、
小学校・中学校調査の結果を中心に、
第1回調査(1997年)から13年間の変化のうち
特徴的なデータを取り上げてご紹介します。



調査概要

- 調査テーマ 小学校・中学校・高校における学習指導の実態と教員の意識
- 調査方法 郵送法による質問紙調査
- 調査時期 2010年8月～9月
- 調査対象 全国の公立小学校・中学校・高校の校長および教員

【小学校】校長 560名（配布数 1,800通、回収率 31.1%）
 教員 2,688名（配布数 10,800通、回収率 24.9%）
 ＊学級担任をしている教員を対象に実施。

【中学校】校長 573名（配布数 1,800通、回収率 31.8%）
 教員 2,827名（配布数 10,800通、回収率 26.2%）
 ＊国語・社会・数学・理科・外国語のいずれかを担当している教員を対象に実施。

【高校】校長 830名（配布数 2,000通、回収率 41.5%）
 教員 4,791名（配布数 12,000通、回収率 39.9%）
 ＊国語・地理歴史・公民・数学・理科・外国語のいずれかを担当している教員を対象に実施。

＊抽出方法…全国の公立小・中・高校のリストより、都道府県の教員数に応じた抽出確率で無作為に学校を抽出。校長調査は、校長に回答を依頼した。教員調査は、年齢、性別、担当学年、担当教科を考慮した各学校6名の教員の抽出を校長に依頼した。

- 調査項目
 - 【校長調査】
 学校教育目標／年間授業時数／時間割の工夫／教育課程内・外の取り組み／少人数指導／定期試験／教員の指導力への評価／校内研修／新学習指導要領に関する研究の進行状況／新学習指導要領の全面实施への不安 など
 - 【教員調査】
 授業の進め方・内容・方法／学習意欲を高める工夫／新学習指導要領の全面实施への不安／宿題・家庭学習指導／定期試験／通信簿／進路指導／年間行事／指導観／指導力向上の取り組み／児童・生徒の変化／保護者の変化／日常生活／教職の魅力／悩み／教員生活の満足度／将来展望 など

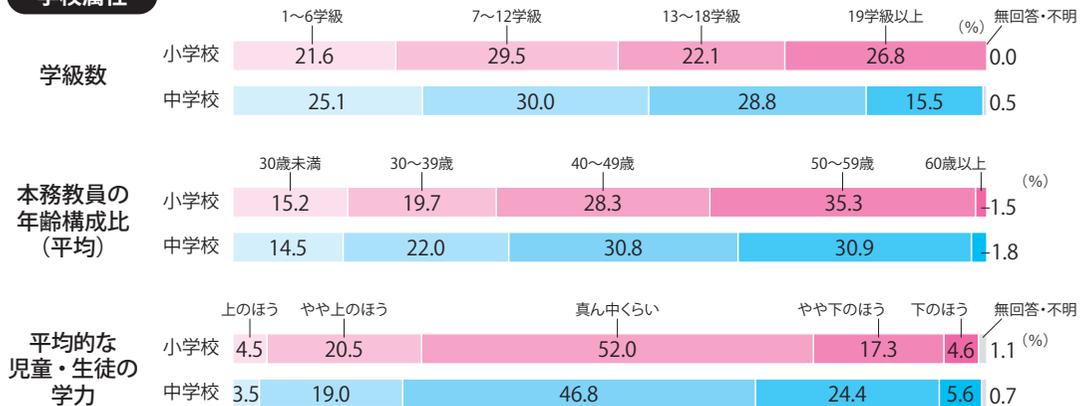
●分析の枠組み

	調査方法	調査時期	調査地域	校長調査			教員調査		
				小学校	中学校	高校	小学校	中学校	高校
97年調査 (第1回調査)	郵送法による質問紙調査 教職員名簿をもとにした系 統抽出(無作為)	1997年12月 ～1998年1月	6地域					938名	
98年調査 (第2回調査)		1998年10月 ～11月					1,033名		
02年調査 (第3回調査)	学校通しによる質問紙調査 地域類型別構成を考慮した 割り当て法	2002年9月 ～10月	14地域	642名	603名		3,468名	2,891名	
07年調査 (第4回調査)	郵送法による質問紙調査	2007年8月 ～9月	全国	528名	559名		1,872名	2,109名	
10年調査 (第5回調査)		2010年8月 ～9月	全国	560名	573名	830名	2,688名	2,827名	4,791名

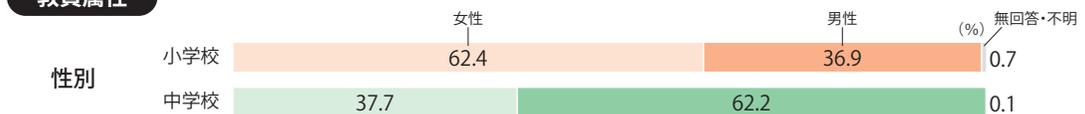
※ 各回の調査方法、調査地域は異なっているため、経年データを解釈する際に考慮する必要がある。
 ※ 07年調査、10年調査と比較するため、97年調査、98年調査、02年調査は、得られたサンプルのうち、小学校は学級担任をしている教員に、中学校は国語・社会・数学・理科・外国語のいずれかを担当している教員に限定して分析を行っている。
 ※ 02年、07年の校長調査には、副校長、教頭、教務事項に詳しい教員の回答も含まれている。
 ※ (小学校校長)は小学校校長の回答、(中学校校長)は中学校校長の回答、(小学校教員)は小学校教員の回答、(中学校教員)は中学校教員の回答を示している。

基本属性

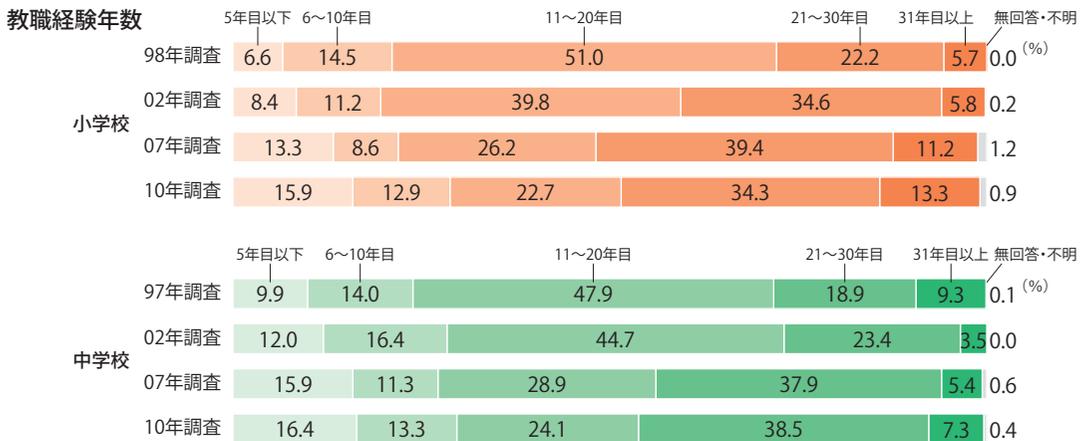
学校属性



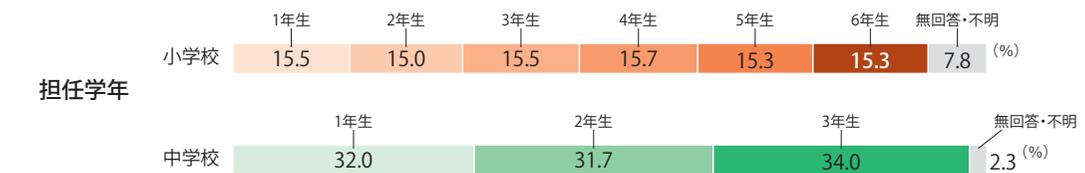
教員属性



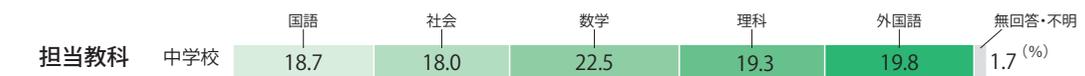
教職経験年数



担任学年



担当教科



※ 学校属性のうち、「学級数」は校長と教員の回答から特定した。その他の学校属性は校長の回答、教員属性は教員の回答。
 ※ 「教職経験年数」以外は、10年調査の数値。
 ※ 「本務教員の年齢構成比 (平均)」は、学校ごとに本務教員に占める各年齢の教員の比率を算出し、それを平均したもの (小学校n=545、中学校n=554)。
 ※ 「平均的な児童・生徒の学力」は、「貴校の平均的な児童 (生徒) の学力は、全国の公立小学校 (中学校) の中でだいたいどれくらいですか」の質問への回答。
 ※ 「担任学年」の中学校の数値には、副担任をしている学年、もっとも多く授業を担当している学年も含まれる。

本調査の時代背景・これまでの調査の主な結果

資料1：学習指導に関連した主な教育環境動向（1989～2013年）

西暦	教育基本法・学習指導要領	関連する主な動向	
1989年	小・中学校「学習指導要領」告示 ●『新しい学力観と個性尊重の教育』 ●小学校低学年に「生活科」導入 ●中学校で選択教科の履修幅の拡大 高等学校「学習指導要領」告示		
1990年			
1991年			
1992年	小学校「学習指導要領」の全面実施	学校週5日制（第2土曜日が休業日に）	
1993年	中学校「学習指導要領」の全面実施		
1994年	高等学校「学習指導要領」の実施（学年進行）		
1995年		学校週5日制（第2・4土曜日が休業日に）	
1996年		中教審第一次答申…「生きる力」の育成と「ゆとり」の確保	
1997年		教課審中間まとめ…「総合的な学習の時間」の導入を提示	第1回調査
1998年	小・中学校「学習指導要領」告示 ●『「生きる力」の育成と「ゆとり」の確保』 ●授業時数の大幅削減と教育内容の厳選 ●「総合的な学習の時間」の導入		第2回調査
1999年	高等学校「学習指導要領」告示	「学力低下論争」始まる	
2000年			
2001年			
2002年	小・中学校「学習指導要領」の全面実施	文部科学省「確かな学力の向上のための2002アピール『学びのすすめ』」を公表 完全学校週5日制実施 絶対評価の導入	第3回調査
2003年	高等学校「学習指導要領」の実施（学年進行） 小・中・高等学校「学習指導要領」一部改正 ●学習指導要領を最低基準とし、学力重視を強調		
2004年		「PISA2003」「TIMSS2003」結果公表	
2005年		文部科学省「読解力向上プログラム」公表	
2006年	改正教育基本法公布・施行		
2007年		「全国学力・学習状況調査」実施開始 「PISA2006」結果公表	第4回調査
2008年	小・中学校「学習指導要領」告示 ●「生きる力」の育成 ●基礎的・基本的な知識・技能の習得 ●思考力・判断力・表現力等の育成 ●確かな学力を確立するために必要な時間の確保 ●学習意欲の向上や学習習慣の確立 ●豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実	「TIMSS2007」結果公表	
2009年	高等学校「学習指導要領」告示		
2010年		「PISA2009」結果公表	第5回調査
2011年	小学校「学習指導要領」の全面実施		
2012年	中学校「学習指導要領」の全面実施		
2013年	高等学校「学習指導要領」の実施（学年進行）		

資料 2：小・中学校の年間総授業時数の変化（1992年度～）

		小学校							中学校				
		1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	合計	1年生	2年生	3年生	合計	
1989年告示 学習指導要領	小学校 1992年度～ 中学校 1993年度～	850	910	980	1,015	1,015	1,015	5,785	1,050	1,050	1,050	3,150	第1回調査 第2回調査
1998年告示 学習指導要領	小学校 2002年度～ 中学校 2002年度～	782	840	910	945	945	945	5,367	980	980	980	2,940	第3回調査 第4回調査
2008年告示 学習指導要領	小学校 2009・2010年度 中学校 2009～2011年度 (移行措置期間中)	816	875	945	980	980	980	5,576	980	980	980	2,940	第5回調査
	小学校 2011年度～ 中学校 2012年度～	850	910	945	980	980	980	5,645	1,015	1,015	1,015	3,045	

※ 小学校は1単位時間45分、中学校は1単位時間50分。

● 「学習指導基本調査」の主な結果

完全学校週5日制への移行期

第1回調査
中学校
(1997年)

- ・月2回の週5日制導入に対して、年間総授業時数を変えていない学校が4校に3校。3校に2校は土曜日の授業を他の曜日に上乘せし、3校に1校は短縮授業日を削減。
- ・体験的な学習や問題解決的な学習を重視する方向が示されるなか、「調べ学習」は6割を超える学校が実施、「校外での体験学習」は2割強にとどまる。

第2回調査
小学校
(1998年)

- ・月2回の週5日制導入に対して、年間総授業時数を減らした学校が5校に2校。
- ・「学校内での体験的方法による学習」(86.2%)、「学校外での現場・フィールドでの体験的方法による学習」(58.7%)など、新しい学習指導方法が積極的に取り入れられている。

1998年告示の学習指導要領の全面实施時期

第3回調査
小学校・中学校
(2002年)

- ・「総合的な学習の時間」では、小・中学校ともに、「テーマ学習」が1つの柱に。小学校では教科の学習内容を深める活動、中学校では進路学習や学校行事の一環としての活動などを行う傾向。
- ・「学習指導要領」に対して、「子どもの学ぶ意欲を引き出す上で効果的だ」「子どもの生活にゆとりが生まれる」など肯定的な評価がある一方で、「教員の指導上の負担が大きくなる」「学校による指導力の格差が大きくなる」などの指摘も。

2003年の学習指導要領一部改正下

第4回調査
小学校・中学校
(2007年)

- ・教員の指導観が、子どもの個性や自主性重視から、学力底上げ路線へ大きく変化。
- ・体験的な活動を行う授業を心がける教員の割合が減少。
- ・宿題を出す頻度や分量が増加。家庭学習の時間の指導をしている教員の割合も増加。
- ・7割を超える教員が忙しいことに悩んでいる。

CONTENTS

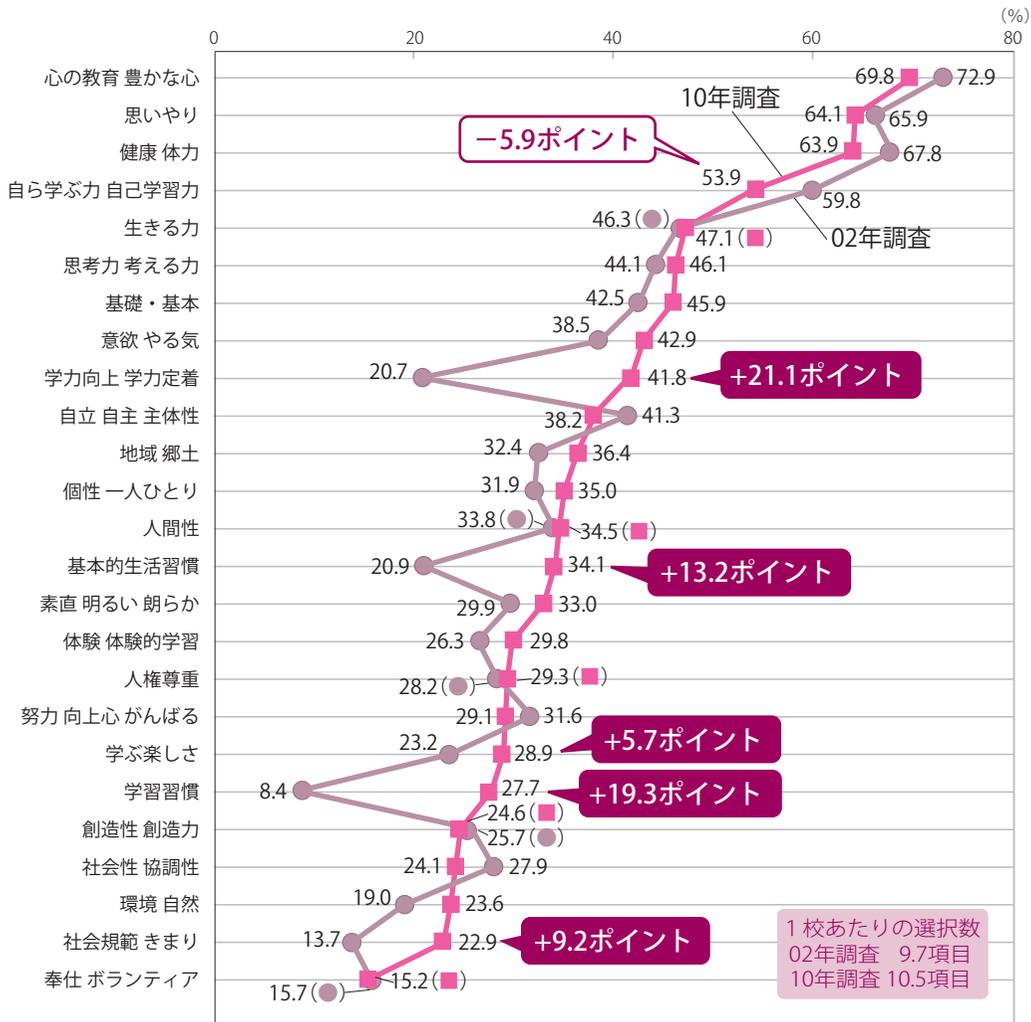
1. 学校教育目標	6	6. 新学習指導要領への不安と対応	22
2. 教員の指導観	8	7. 教員の悩み	27
3. 教育課程編成	12	8. 教員の日常生活	28
4. 学習指導	14	9. 教職の魅力	30
5. 児童・生徒の変化	21	10. 教員の満足度	31

「学力向上 学力定着」「学習習慣」を目標に掲げる学校が増加

小学校のTOP3は「心の教育 豊かな心」「思いやり」「健康 体力」で、6割以上の学校が目標に掲げている。02年調査に比べてとくに比率が上がったのは、「学力向上 学力定着」（21.1ポイント増）、「学習習慣」（19.3ポイント増）、「基本的生活習慣」（13.2ポイント増）で、学力や生活習慣が重視されている。

Q 貴校の「学校教育目標」には、次の言葉が含まれていますか。

図1-1 学校教育目標（経年比較） **小学校 校長**

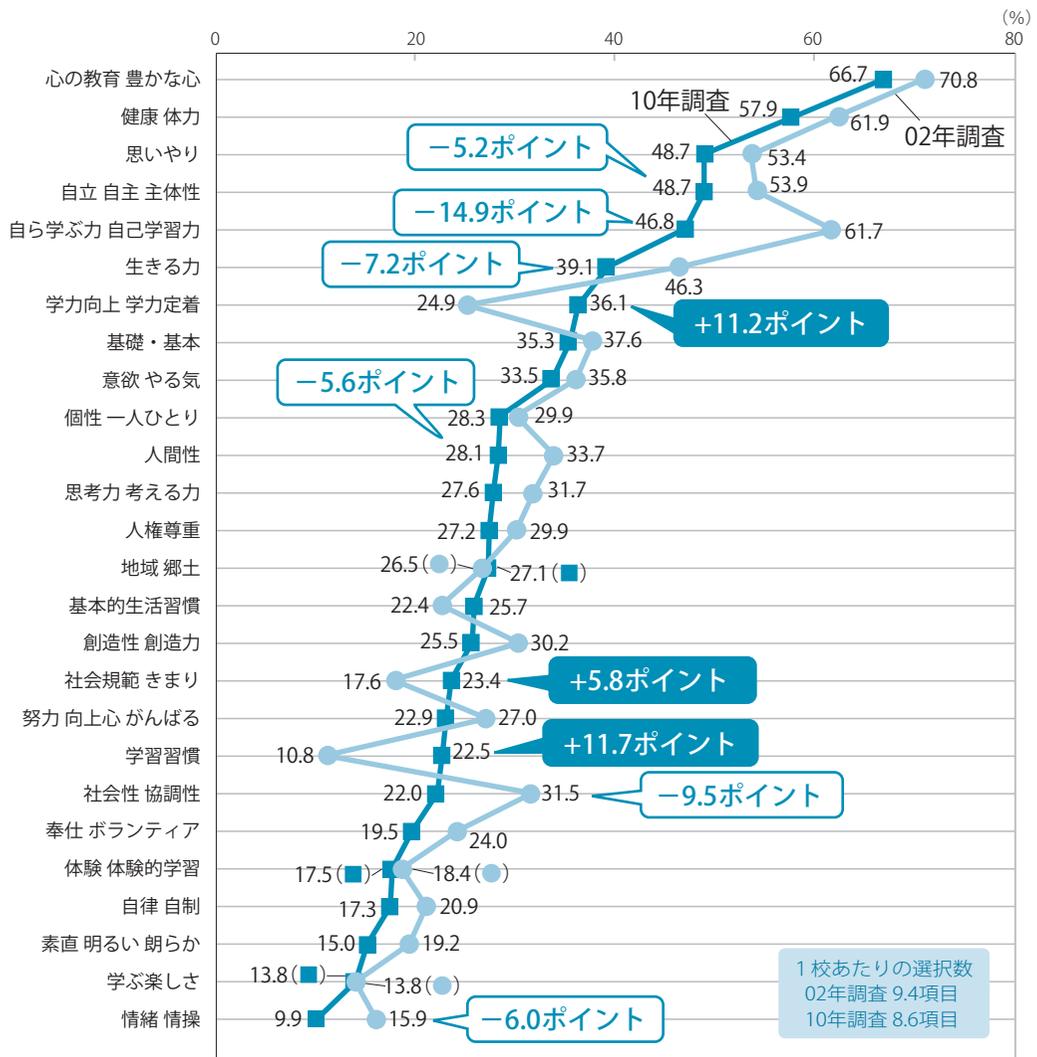


※複数回答。
 ※02年調査の選択肢は33項目、10年調査は、02年調査の選択肢に「その他」を加えた34項目。そのうち10年調査の上位25項目を示している。
 ※1校あたりの選択数は、「その他」を除く33項目のうち選択された項目数の平均。無回答・不明を除いて算出している。
 ※は02年調査と10年調査で5ポイント以上差があるもの。

中学校のTOP3は、「心の教育 豊かな心」「健康 体力」「思いやり」で、順位は異なるが、小学校と同じ項目があがっている。02年調査に比べ、「学習習慣」「学力向上 学力定着」が10ポイント以上増加しているのに対し、「自ら学ぶ力 自己学習力」「社会性 協調性」など減少している項目も多い。

Q 貴校の「学校教育目標」には、次の言葉が含まれていますか。

図1-2 学校教育目標（経年比較） **中学校 校長**



※複数回答。

※02年調査の選択肢は33項目、10年調査は、02年調査の選択肢に「その他」を加えた34項目。そのうち10年調査の上位25項目、および02年調査と10年調査で5ポイント以上差があった「情緒、情操」の数値を示している。

※1校あたりの選択数は、「その他」を除く33項目のうち選択された項目数の平均。無回答・不明を除いて算出している。

※ ■ ● は02年調査と10年調査で5ポイント以上差があるもの。

子どもの「可能性が開花するのを支援する」より、「必要なことを教え訓練する」傾向が強まっている

「たとえ強制してでも、とにかく学習させること」「一人前の大人になるために必要なことを教え、訓練すること」を重視する傾向は年々強まっている。一方、「どの子どもにも、できるだけ学力をつけさせること」(93.5%)、「教科書や指導要領の内容を、とにかく最後まで扱うこと」(77.9%)、「子どもを公平に評価すること」(77.5%)を重視する傾向は、07年調査から変わらない。



あなたは、授業や生活指導の面で、どのようなことを大切にしていますか。各ペアについて、あえていえば重視していると思うほうに○をつけてください。

図2-1 教員の指導観（経年比較） **小学校 教員**



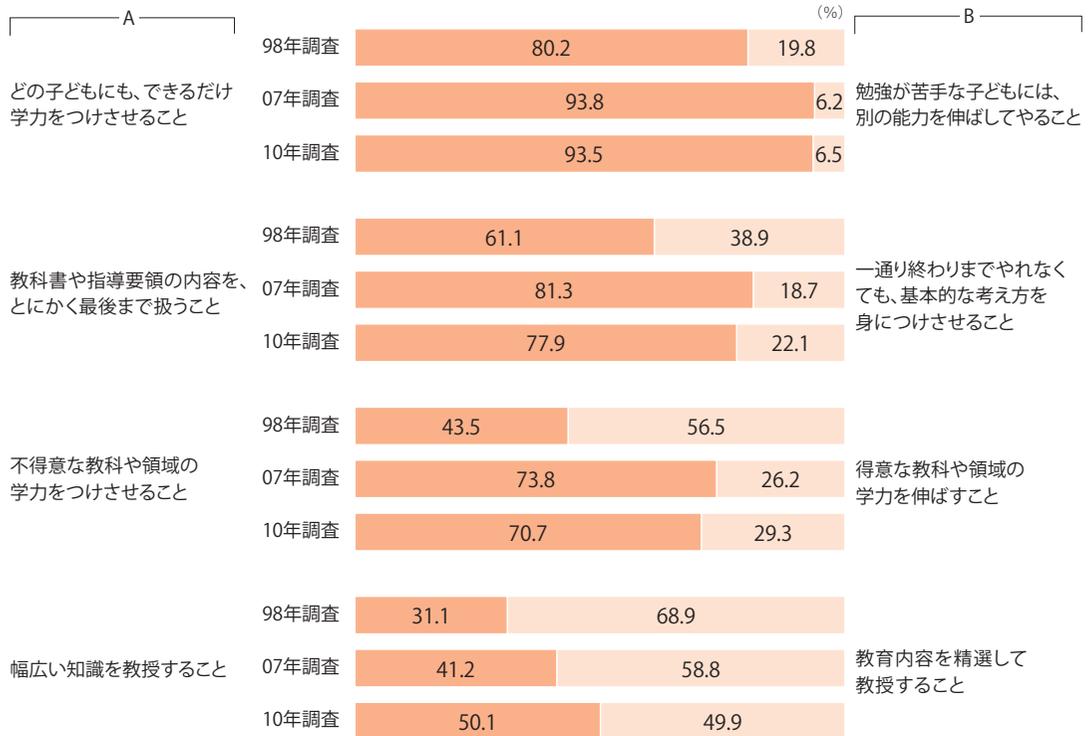
表2-1 教員の指導観（教職経験年数別、経年比較） **小学校 教員**

		(%)				
		5年目以下	6~10年目	11~20年目	21~30年目	31年目以上
子どもの持っている可能性が開花するのを、支援すること	07年調査	67.2	57.6	53.6	61.8	66.0
	10年調査	55.5 ↓	51.9 ↓	53.2	56.2 ↓	64.8
一人前の大人になるために必要なことを教え、訓練すること	07年調査	32.8	42.4	46.4	38.2	34.0
	10年調査	44.5 ↑	48.1 ↑	46.8	43.8 ↑	35.2

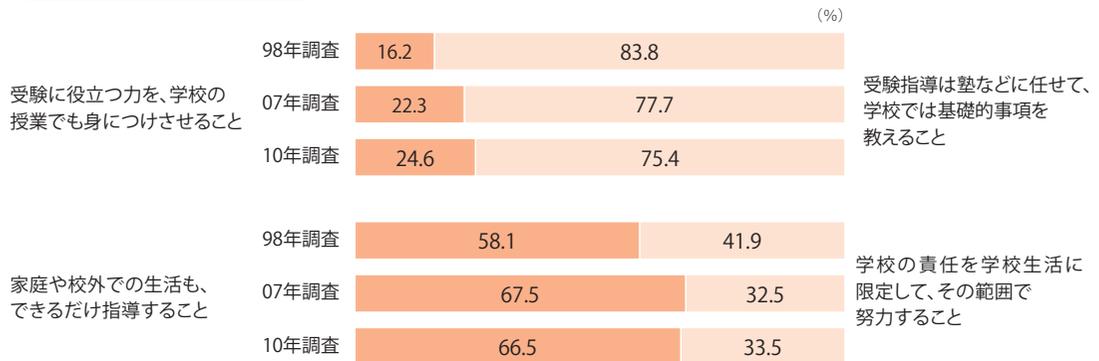
※数値は、無回答・不明を除いて算出している。

※07年調査に比べ、↓↑は10ポイント以上、↓↑は5ポイント以上増減した項目。

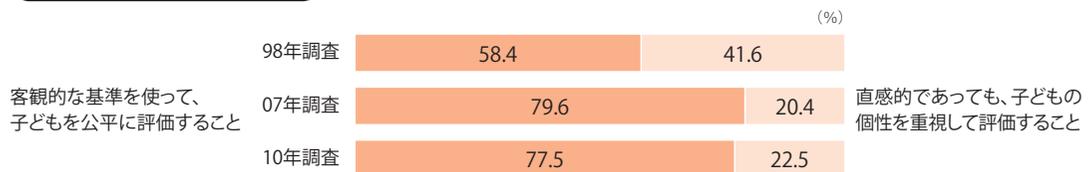
育てる力と教育内容



学校・教員の役割



評価方法



※数値は、無回答・不明を除いて算出している。

小学校と同様に、子どもの「可能性が開花するのを支援する」より、「必要なことを教え訓練する」傾向が強まっている

教員の指導観は、小学校と同様に、強制や訓練を重視する傾向が強まり、「一人前の大人になるために必要なことを教え、訓練すること」が6割を超えている。その他、「受験に役立つ力を、学校の授業でも身につけさせること」(86.2%)、「家庭や校外での生活も、できるだけ指導すること」(66.1%)を重視する教員が年々増加しており、教員の役割意識はさらに広がっている。



あなたは、授業や生徒指導の面で、どのようなことを大切にしていますか。各ペアについて、あえていえば重視していると思うほうに○をつけてください。

図2-2 教員の指導観（経年比較） **中学校教員**



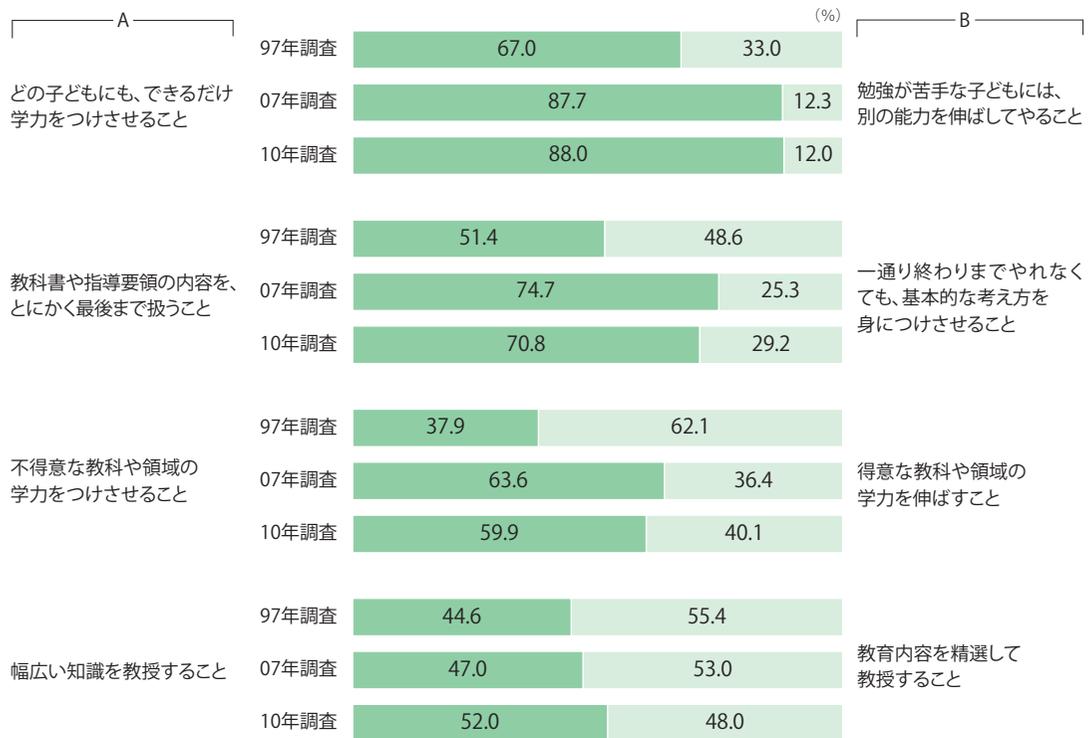
表2-2 教員の指導観（教職経験年数別、経年比較） **中学校教員**

		(%)				
		5年目以下	6~10年目	11~20年目	21~30年目	31年目以上
子どもの持っている可能性が開花するのを、支援すること	07年調査	49.1	39.7	40.0	45.6	45.5
	10年調査	44.4	34.3 ↓	34.5 ↓	40.3 ↓	43.4
一人前の大人になるために必要なことを教え、訓練すること	07年調査	50.9	60.3	60.0	54.4	54.5
	10年調査	55.6	65.7 ↑	65.5 ↑	59.7 ↑	56.6

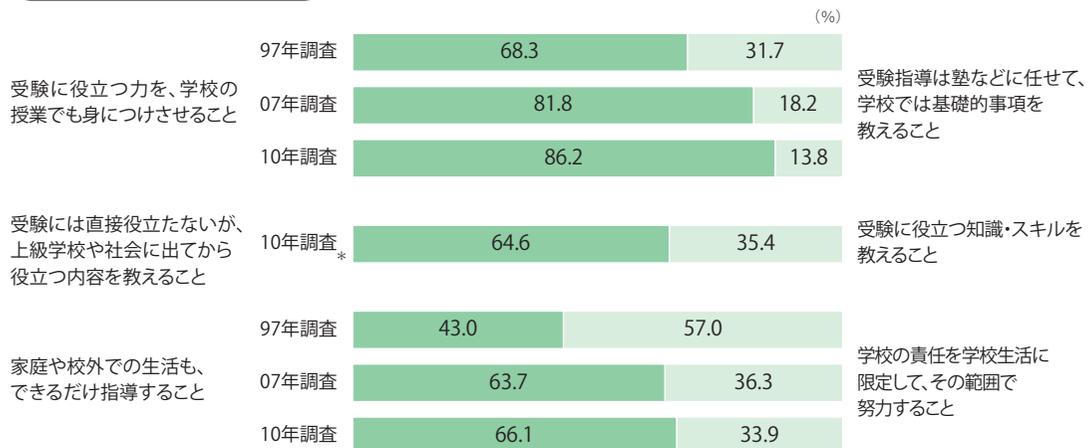
※数値は、無回答・不明を除いて算出している。

※ ↓ ↑ は07年調査に比べ、5ポイント以上増減した項目。

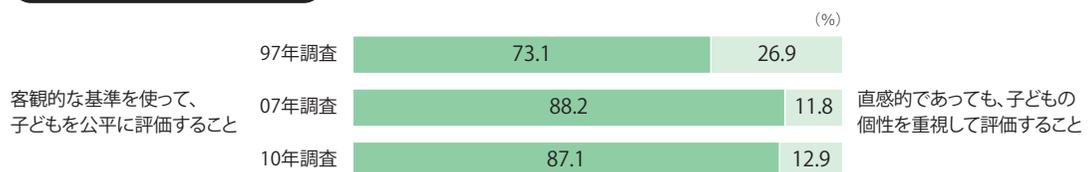
育てる力と教育内容



学校・教員の役割



評価方法



※数値は、無回答・不明を除いて算出している。

※*印は、10年調査より新たに追加した項目。

年間授業時数

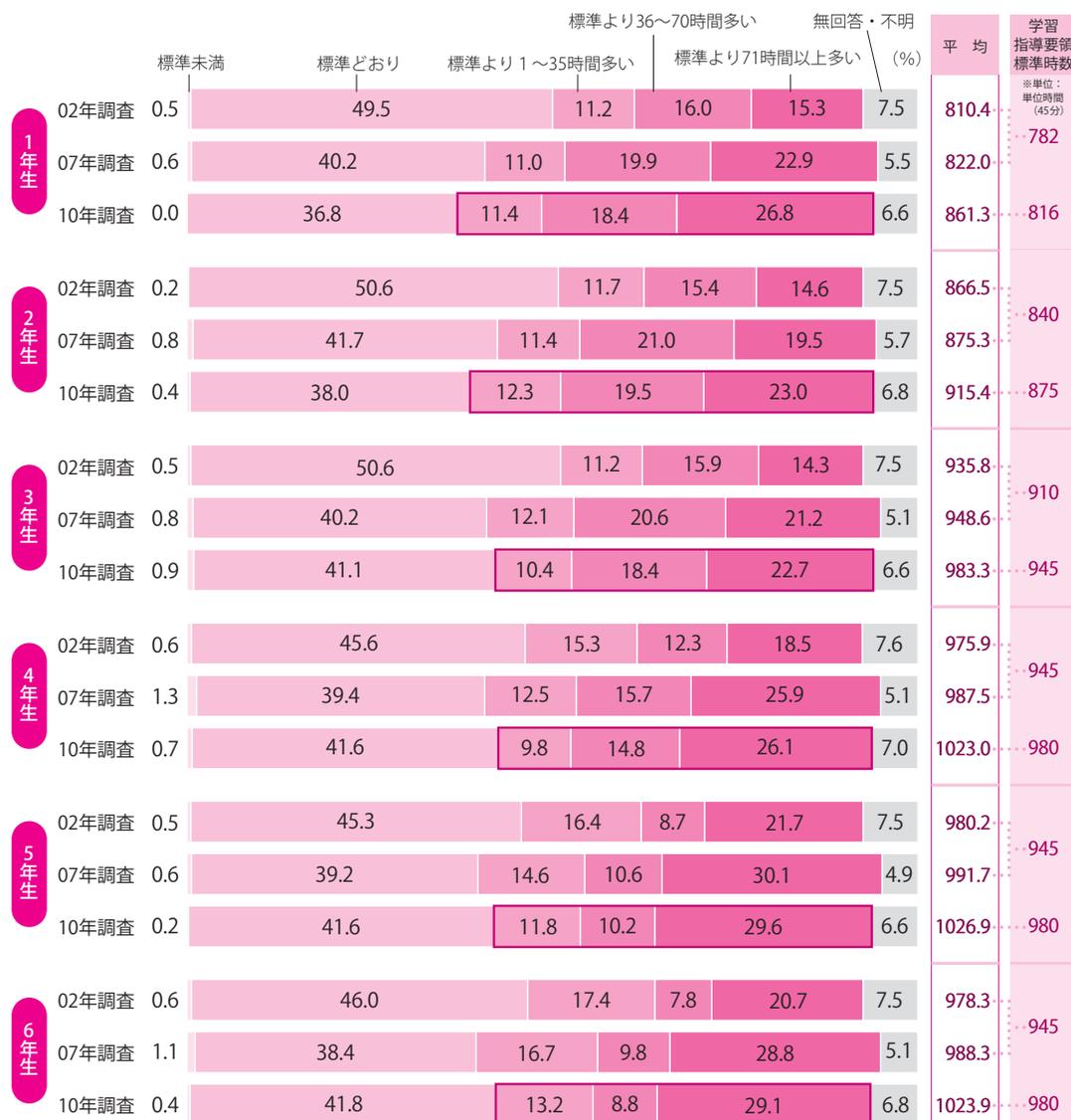
小学校の5割強、中学校の3割強が標準より多い授業時数を設定している

小学校の10年調査をみると、標準どおりの時数を設定しているのは、どの学年でも4割前後で、5割強の学校はすでに標準より多い時数を設定している。中学校は、標準より多い時数を設定している比率が、どの学年でも07年調査に比べて上がり、3割強となっている。



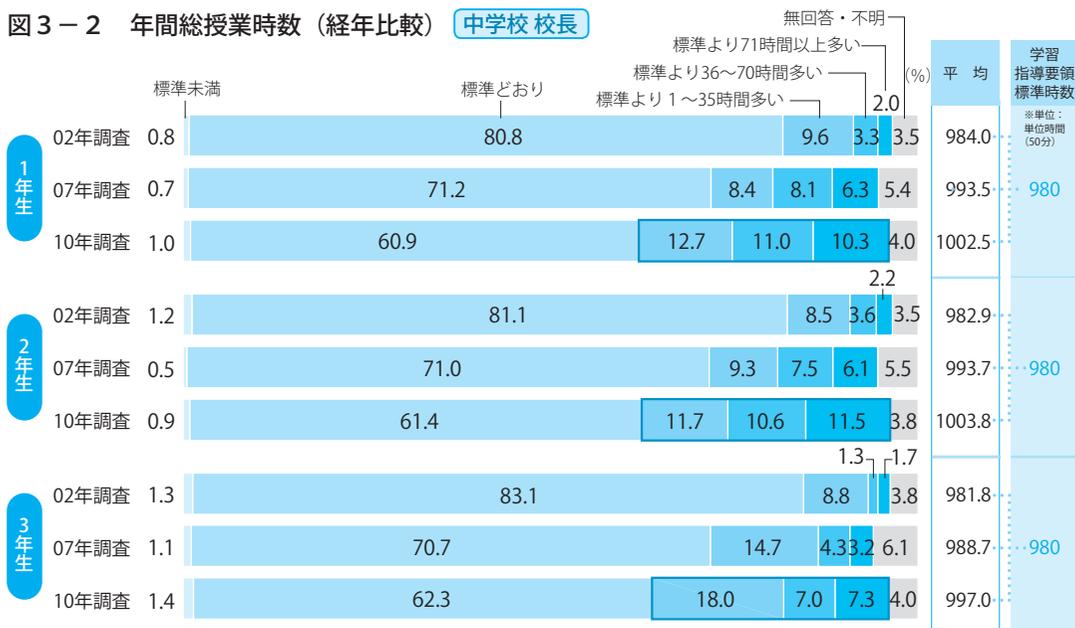
今年度の貴校の各学年の年間総授業時数は何時数ですか。

図3-1 年間総授業時数（経年比較） **小学校 校長**



※年間総授業時数の平均は、無回答・不明を除いて算出している。

図3-2 年間総授業時数（経年比較） **中学校 校長**



※年間総授業時数の平均は、無回答・不明を除いて算出している。

教育課程内・外の取り組み

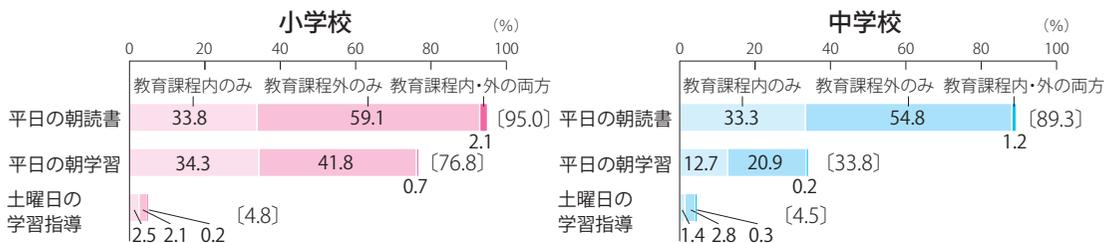
朝読書の実施率は、9割前後と高い

小学校では、朝読書は9割5分、朝学習は7割5分の学校で実施されており、中学校でも、朝読書の実施率は約9割と高い。また、小・中学校とも、平日の放課後の補習は増加する傾向にある。長期休業中の学習の指導は、小・中学校とも減少している。



貴校では、今年度、次のような取り組みを実施していますか。

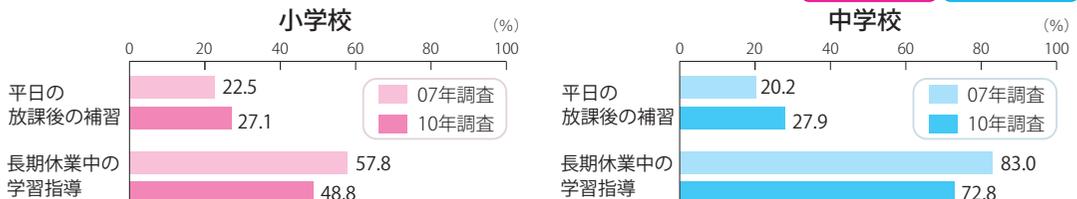
図3-3 朝読書、朝学習、土曜日の学習指導の実施（学校段階別、10年調査） **小学校 校長** **中学校 校長**



※「実施している」の%。

※ []は「教育課程内のみ」+「教育課程外のみ」+「教育課程内・外の両方」の%。

図3-4 放課後の補習、長期休業中の学習指導の実施（学校段階別、経年比較） **小学校 校長** **中学校 校長**



・長期休業期間を短くする「やっている」**22.0%**

・長期休業期間を短くする「やっている」**27.9%**

※棒グラフは、「実施している」の%。

※「長期休業期間を短くする」の数値は、「時間割を組むうえで次のような工夫をしたことがありますか」の質問に「やっている」と回答した%。

ティームティーチングなどの実施

ティームティーチングの実施率は増加、習熟度別指導は減少

ティームティーチングの実施率は、07年調査に比べ、小学校で10.3ポイント、中学校で5.8ポイント増加しているのに対して、習熟度別指導の実施率は、小学校で5.1ポイント、中学校で14.0ポイント減少している。また、10年調査の結果を市町村の財政力別にみると、小学校では、どの取り組みについても、財政力が「低」の市町村ほど実施率が低い。



貴校では、次のようなことを実施していますか。
あるいは今後実施する可能性がありますか。

図4-1 ティームティーチングなどの実施率（全体・市町村の財政力別、経年比較） 小学校 校長

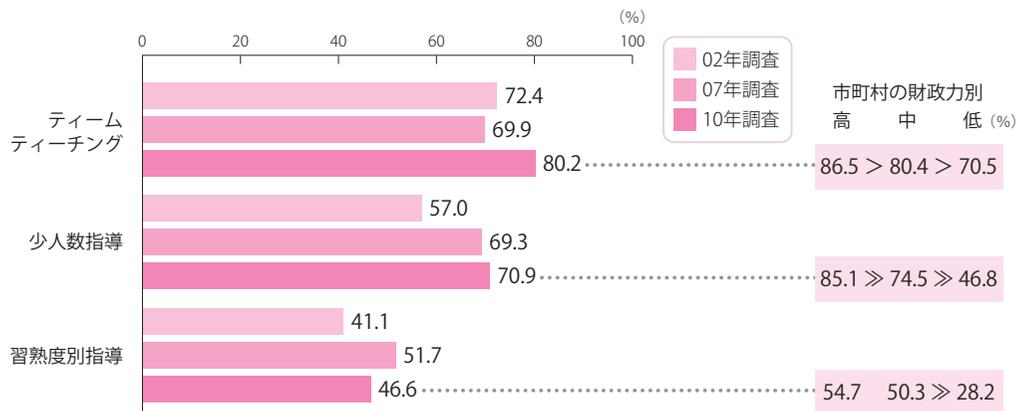
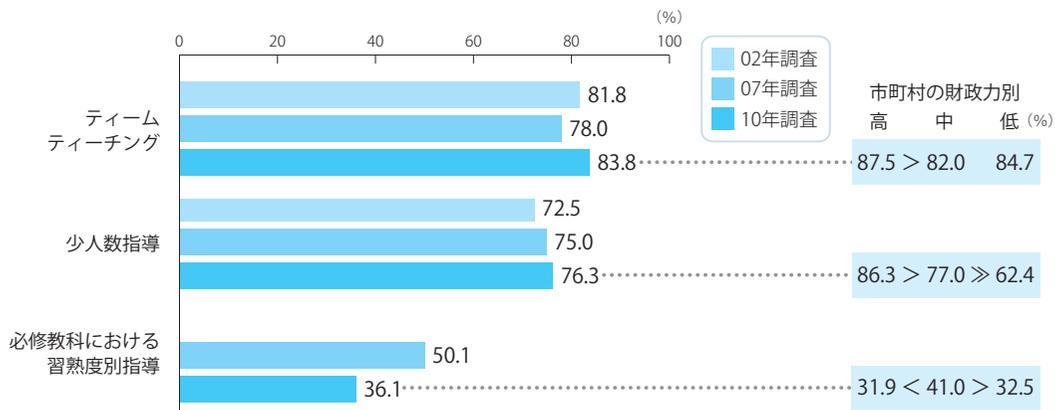


図4-2 ティームティーチングなどの実施率（全体・市町村の財政力別、経年比較） 中学校 校長



※「実施している」の% (図4-1、2)。

※市町村の財政力別の数値は、10年調査の結果。高・中・低は、回答者が回答した都道府県・市区町村名により財政力指数を特定し、サンプル数に偏りがなく3つに区分したもの。小学校の「高」は財政力指数0.77以上 (n=148)、「中」は0.50~0.76 (n=153)、「低」は0.49以下 (n=156)、中学校の「高」は財政力指数0.82以上 (n=160)、「中」は0.51~0.81 (n=161)、「低」は0.50以下 (n=157)。特別区(東京23区)および政令指定都市は、財政力指数の算出方法や法制上の差異から市町村データと比較することが困難なため、分析から除外している (図4-1、2)。

※<>は5ポイント以上、<<>は10ポイント以上差があるもの (図4-1、2)。

※中学校の「必修教科における習熟度別指導」の07年調査の数値は、学年別・教科別にたずねた質問のいずれかで「実施している」と回答した校長の比率。02年調査は、質問のしかたが異なるため、分析から除いている (図4-2)。

心がけている授業時間の使い方・進め方

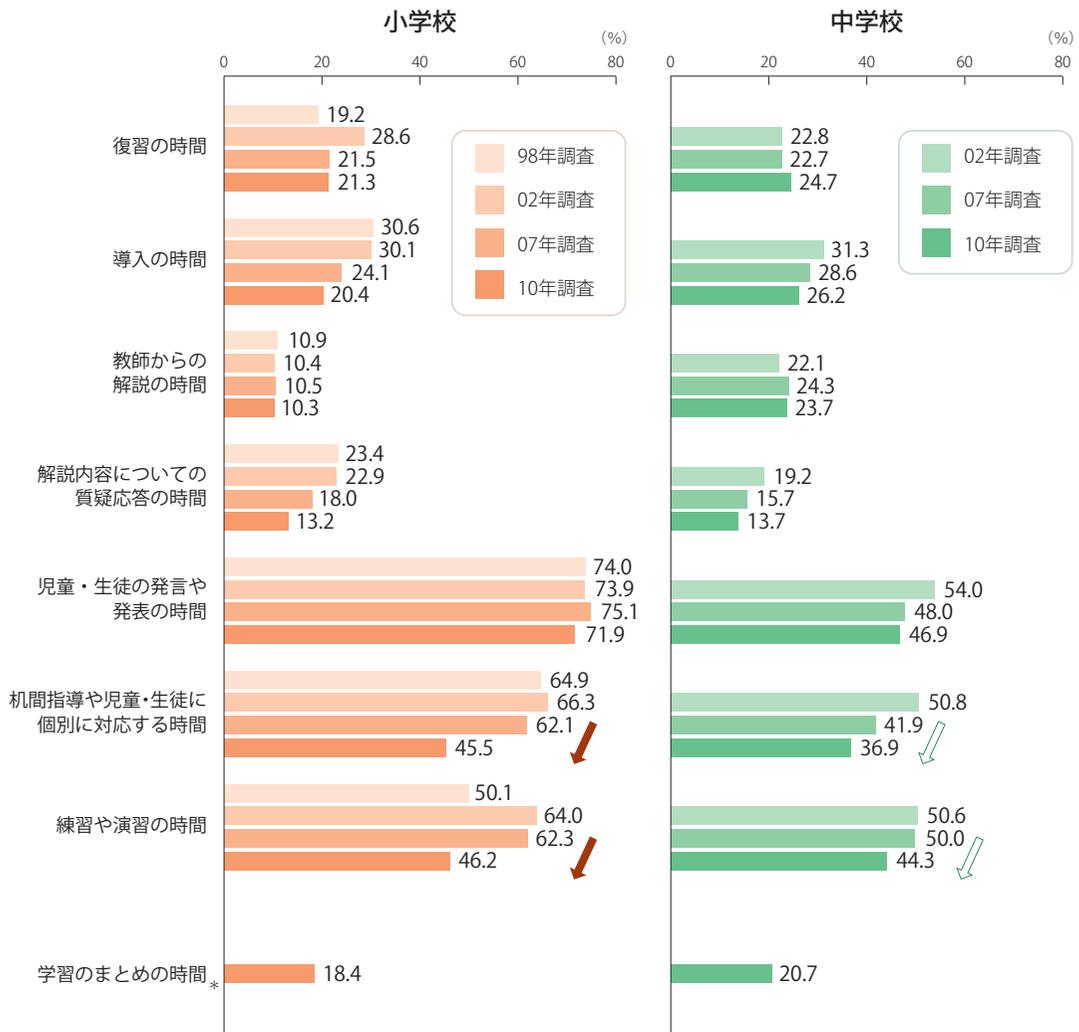
「個別に対応する時間」や「練習や演習の時間」が大きく減少

心がけている授業時間の使い方・進め方をみると、小・中学校教員ともに、「児童・生徒の発言や発表の時間」の比率がもっとも高い（小学校約7割、中学校5割弱）。一方、「机間指導や児童・生徒に個別に対応する時間」「練習や演習の時間」は、07年調査に比べ、とくに小学校で大きく減少している。



あなたは、教科の授業を進める際に
どのような時間の使い方や進め方を心がけていますか。

図4-3 心がけている授業時間の使い方・進め方

(学校段階別、経年比較) 小学校教員 中学校教員

※「多くするように特に心がけている」の%。

※中学校の97年調査ではこれらの項目をたずねていない。

※*印は、10年調査より新たに追加した項目。

※10項目のうち、8項目を図示している。

※07年調査に比べ、↓は10ポイント以上、↘は5ポイント以上減少したものの。

心がけている授業内容

心がけている授業内容は、 知識・技能の「習得」が約8割、「活用」が4割台

小・中学校ともに約8割の教員が「基礎的・基本的な知識・技能を習得する学習」を「多くするように特に心がけている」と回答している。「基礎的・基本的な知識・技能を活用する学習」は4割台、また「探究的な学習」については1～2割台の回答にとどまっている。

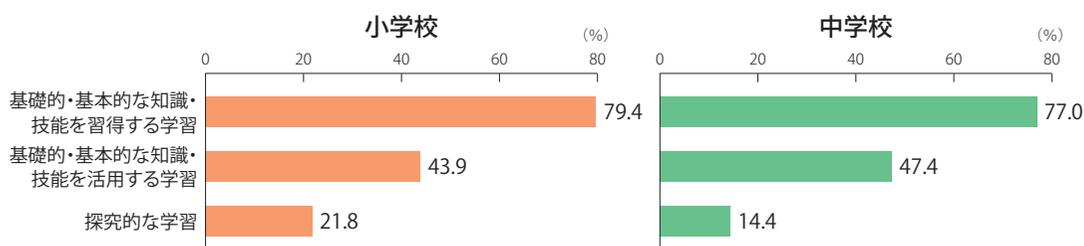


あなたは、教科や領域の授業において、次のような内容をどれくらい心がけていますか。

図4-4 心がけている授業内容（学校段階別、10年調査）

小学校教員

中学校教員



※「多くするように特に心がけている」の%。

※小学校は5項目のうち3項目を、中学校は6項目のうち3項目を图示している。

用いている授業方法

コンピュータを活用した授業は社会と理科でもっとも比率が高い

教科で用いている授業方法をみると、小・中学校とも、「教師がコンピューターを使う授業」は理科でもっとも選択率が高い（小学校4割、中学校5割）。「児童・生徒がコンピューターを使う学習」は社会でもっとも選択率が高い（小学校5割5分、中学校3割強）。また小学校では、「電子黒板を使う授業」の選択率は外国語活動で2割弱である。

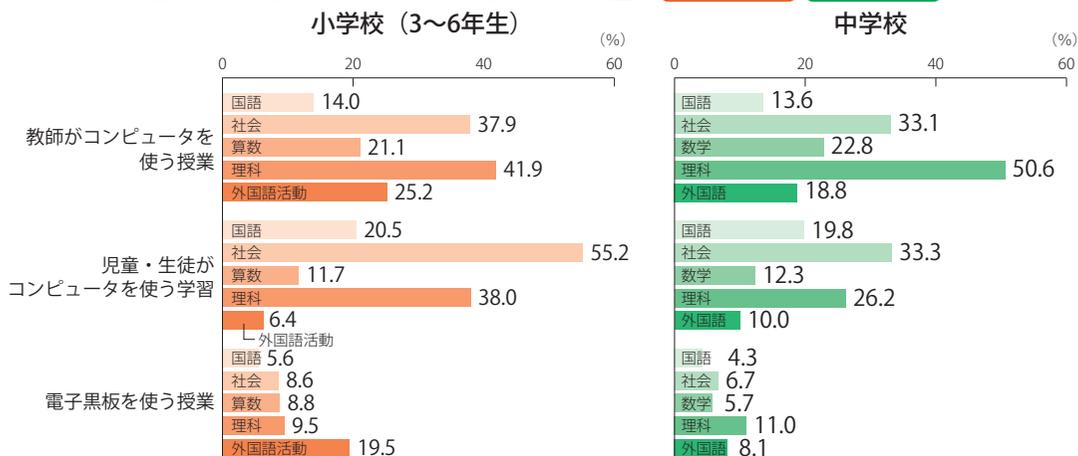


あなたは、教科や領域の授業において、次のような方法を用いていますか。

図4-5 用いている授業方法（学校段階別、10年調査）

小学校教員

中学校教員



※複数回答。

※小学校は、3～6年生の学級担任をしていると回答した教員（n=1,661）のうち、担当している教科をたずねる質問で、その教科を担当していると回答した教員が対象。

※9項目のうち、3項目を图示している。

心がけている授業方法

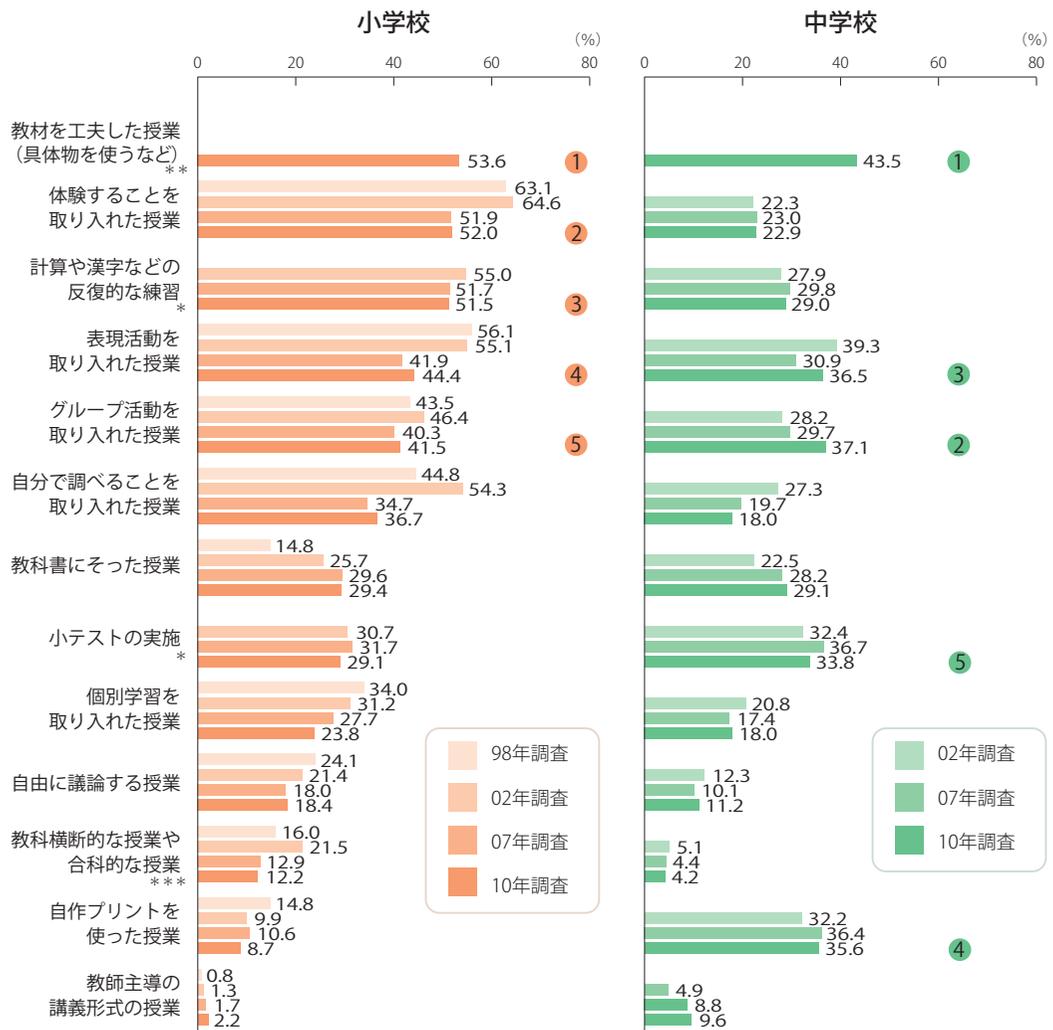
表現活動やグループ活動を
心がける中学校教員が増加

小・中学校ともにトップだったのは「教材を工夫した授業」で4～5割。その他では、小学校では「体験することを取り入れた授業」や「計算や漢字などの反復的な練習」を、中学校では「自作プリントを使った授業」や「小テストの実施」を心がけている教員が多い。また07年調査と比べ、10年調査では、中学校で、「表現活動を取り入れた授業」や「グループ活動を取り入れた授業」を心がけている教員が増加している。



あなたは、教科の授業において、どのような授業方法を心がけていますか。

図4-6 心がけている授業方法（学校段階別、経年比較） 小学校教員 中学校教員



※「多くするように特に心がけている」の%。

※中学校の97年調査ではこれらの項目をたずねていない。

※*印は、小学校の98年調査でたずねていない項目。**印は、10年調査より新たに追加した項目。

※***印の項目は、98年調査では「教科の枠をこえた授業」とたずねている。

※小・中学校のそれぞれ上位5位までを①～⑤、①～⑤と表示している。

宿題（小学校）

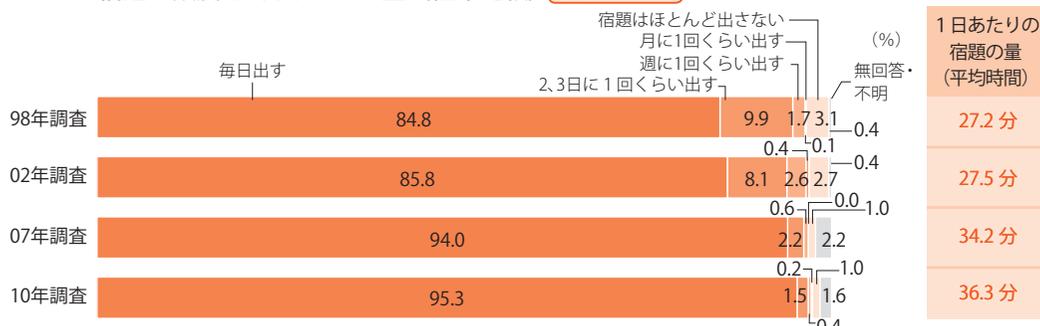
宿題の内容は、「副教材、問題集」「自作プリント」が増加傾向

07年調査と比べて宿題の頻度や量に変化はみられない。宿題の内容は、「計算や漢字などの反復的な練習」（89.4%）や「音読」（78.8%）が上位の傾向は変わらないが、「学校指定の副教材、問題集」（51.3%）や「自作プリント」（27.4%）を宿題にする教員は、02年調査以降、増加傾向にある。



あなたは、どのくらい宿題を出していますか。

図4-7 宿題の頻度と1日あたりの量（経年比較） **小学校教員**

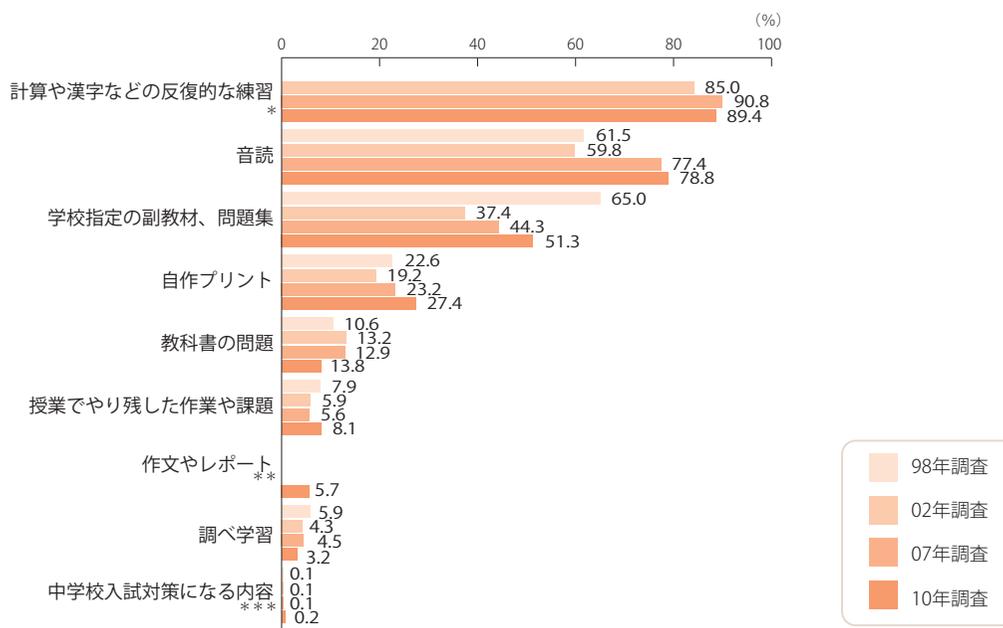


※1日あたりの宿題の量（平均時間）は、宿題を「毎日出す」～「月に1回くらい出す」と回答した教員のみを対象とし、「15分」を15分、「1時間」を60分、「それ以上」を75分のように置き換えて、無回答・不明を除いて算出している。



宿題としてどのような内容のものを出していますか。

図4-8 宿題の内容（経年比較） **小学校教員**



※「よく出す」の%。

※宿題を「毎日出す」～「月に1回くらい出す」と回答した教員のみ対象。

※*印は、小学校の98年調査でたずねていない項目。**印は、10年調査より新たに追加した項目。

※***印の項目は、98年調査、02年調査、07年調査では「将来、国・私立中学校や高校入試対策になる内容」とたずねている。

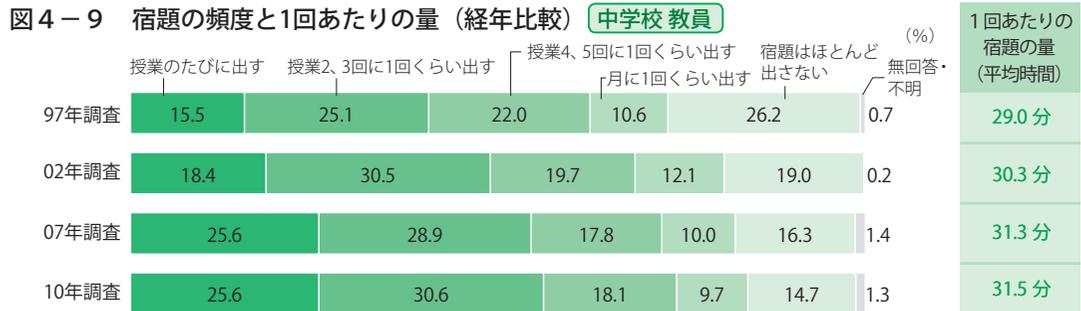
※11項目のうち、9項目を图示している。

宿題（中学校）

宿題の内容は、「定期試験対策」や「入試対策」が増加傾向

07年調査と比べて宿題の頻度や量に変化はみられない。宿題の内容は、「学校指定の副教材、問題集」が上位の傾向は変わらないが、「定期試験対策になる内容」や「高校入試対策になる内容」が増加傾向にある。

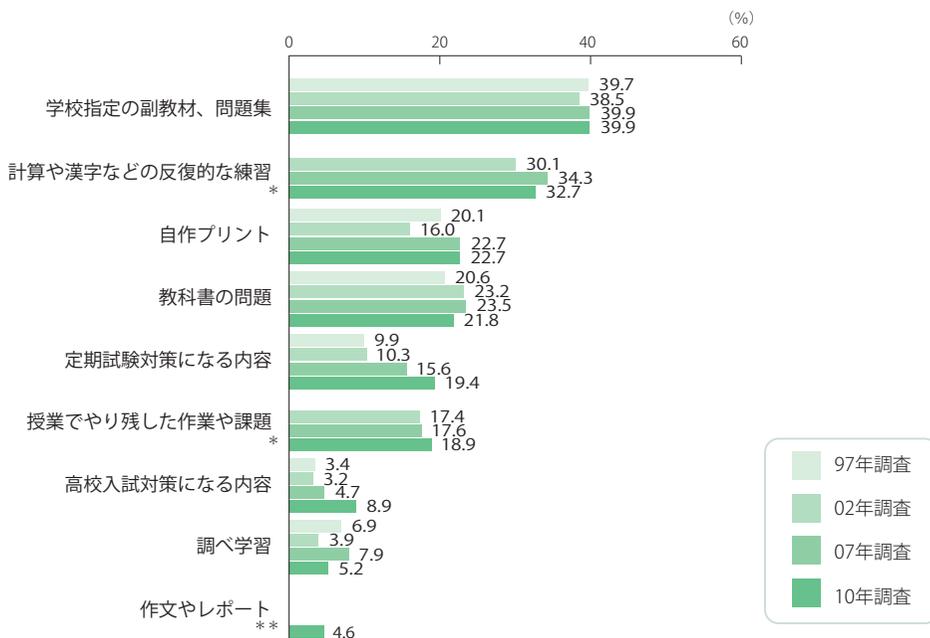
Q あなたは、どのくらい宿題を出していますか。



※1回あたりの宿題の量（平均時間）は、宿題を「授業のたびに出す」～「月に1回くらい出す」と回答した教員のみを対象とし、97年調査～07年調査は「15分」を15分、「1時間」を60分、「それ以上」を75分のように置き換えて無回答・不明を除いて算出。10年調査では1時間以上の項目も追加しているが、経年比較のため「1時間30分」「2時間」「それ以上」の合計%をまとめて75分に置き換え、無回答・不明を除いて算出している。

Q 宿題としてどのような内容のものを出していますか。

図4-10 宿題の内容（経年比較） **中学校 教員**



※「よく出す」の%。

※宿題を「授業のたびに出す」～「月に1回くらい出す」と回答した教員のみ対象。

※*印は、中学校の97年調査でたずねていない項目。**印は、10年調査より新たに追加した項目。

※11項目のうち、9項目を图示している。

通信簿

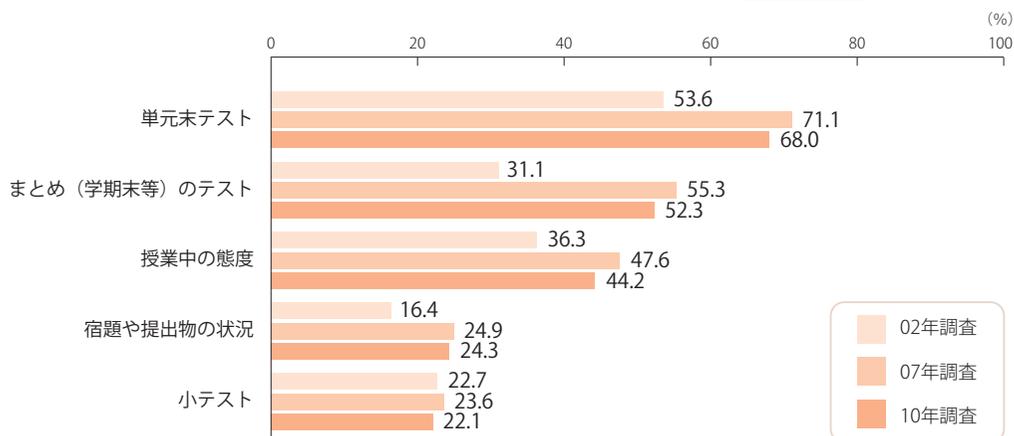
「宿題や提出物の状況」「授業中の態度」を重視する 中学校教員が増加傾向

小学校では、「単元末テスト」「まとめのテスト」「授業中の態度」でわずかな減少がみられるものの、07年調査からの傾向に大きな変化はない。一方、中学校では、「宿題や提出物の状況」「授業中の態度」を評価の材料として重視する教員が増加傾向にある。



通信簿をつけるとき、次の結果をどれくらい重視しますか。

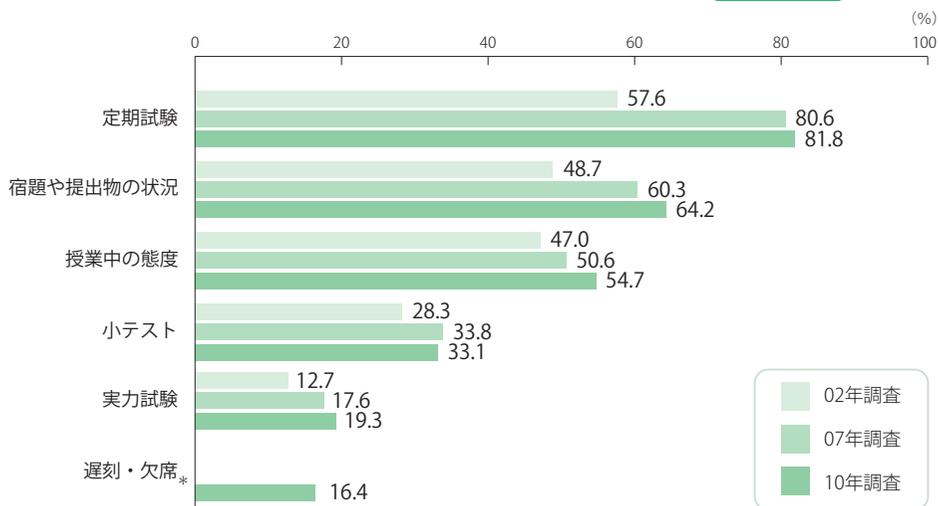
図4-11 算数の通信簿をつけるとき重視するもの（経年比較） **小学校教員**



※「とても重視する」の%。

※ 02年調査、07年調査は算数を教えている教員のみ対象。10年調査は担当している教科をたずねる質問で、算数の授業を担当していると回答した教員および担当教科を無回答の教員が対象。

図4-12 担当教科の通信簿をつけるとき重視するもの（経年比較） **中学校教員**



※「とても重視する」の%。

※ *印は、10年調査より新たに追加した項目。

6割以上の教員が、児童・生徒間の学力格差が「大きくなった」と回答

児童・生徒間の学力格差が「大きくなった」と回答した教員は、小・中学校ともに6割を超えており、その傾向は07年調査から変わらない。一方、児童・生徒集団の学力水準について「低くなった」と回答した教員は、小学校で3割（33.9%）、中学校で4割台（46.6%）で、07年調査に比べて、「低くなった」の回答比率は減少している。



数年前と比べて、最近の児童・生徒はどう変わってきていると思いますか。

図5-1 児童の変化（経年比較） **小学校教員**

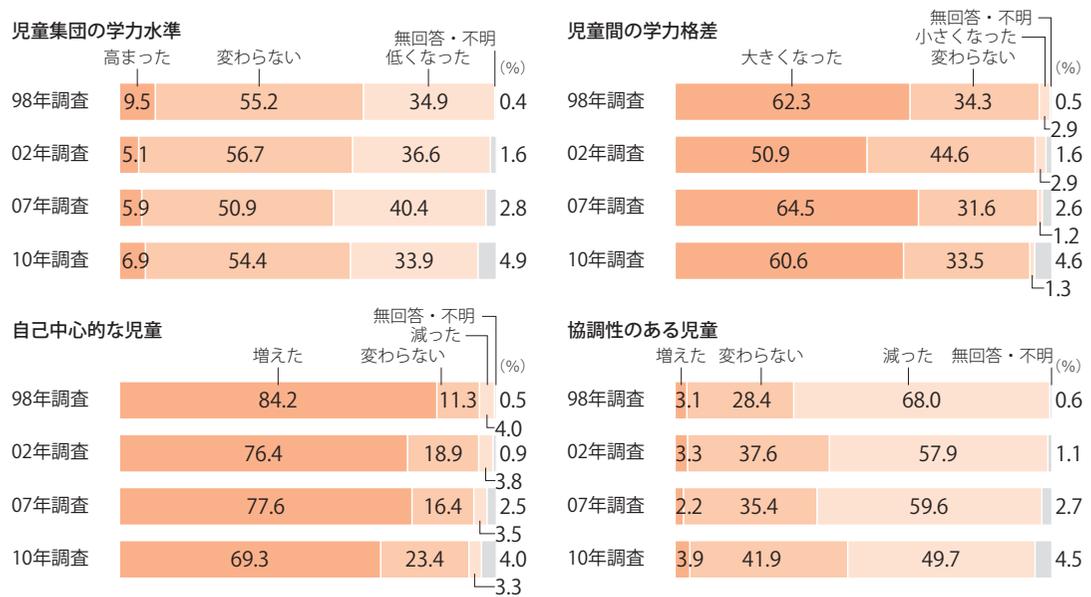
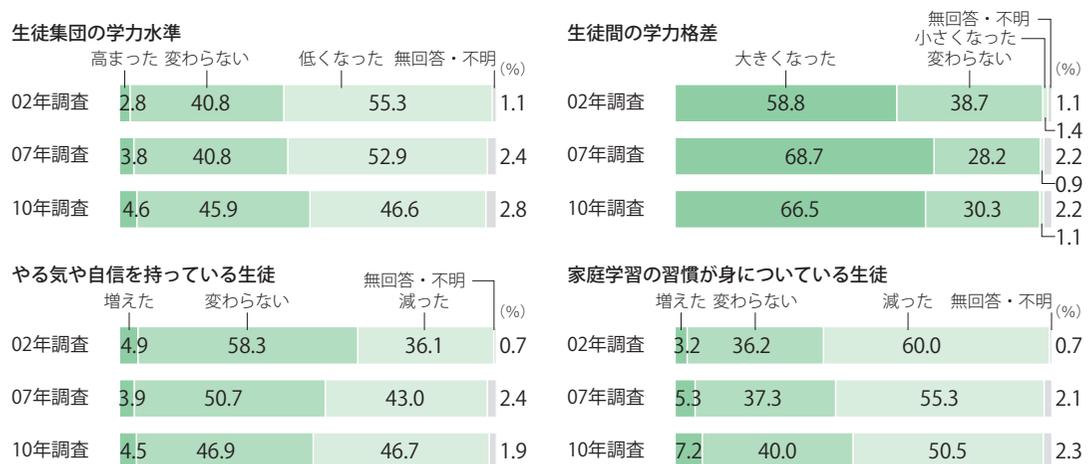


図5-2 生徒の変化（経年比較） **中学校教員**



※中学校の97年調査ではこれらの項目をたずねていない。

「教員の多忙化の加速」を「不安」と感じている校長は9割弱

新学習指導要領の全面実施への不安として、「教員の多忙化の加速」と回答した小・中学校校長は9割弱でトップとなる。また、「児童・生徒間の学力格差の拡大」を不安視する校長も6～7割である。学校段階別にみると、小学校では、若手教員の比率が高い学校の校長のほうが「教員の指導力の不足」について不安が高く（5割5分）、若手教員の比率が低い学校との間に15ポイントの差がある。

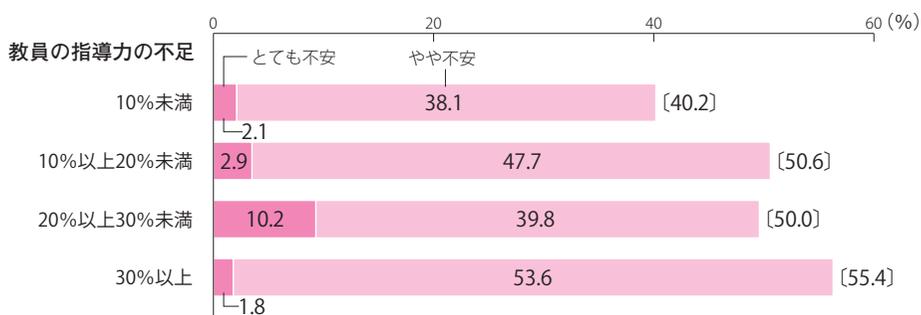
Q 新学習指導要領の全面実施にあたり、次のことにどれくらい不安を感じますか。

図6-1 新学習指導要領の全面実施への不安（10年調査） **小学校校長**



※〔 〕は「とても不安」+「やや不安」の%。

図6-2 新学習指導要領の全面実施への不安（若手教員の比率別、10年調査） **小学校校長**



※学校ごとに本務教員に占める30歳未満の教員の比率を算出し、「10%未満」(n=189)、「10%以上20%未満」(n=172)、「20%以上30%未満」(n=128)、「30%以上」(n=56)の4つに区分した。

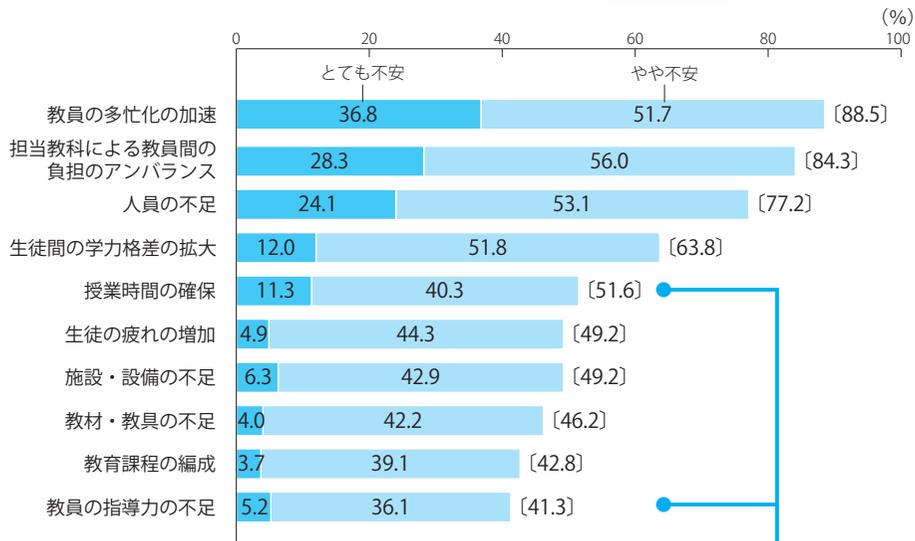
※〔 〕内は「とても不安」+「やや不安」の%。

中学校では、新学習指導要領は現行指導要領に比べ、教科による授業時数の増加幅が異なるため、新学習指導要領の実施への不安として、「担当教科による教員間の負担のアンバランス」と回答した校長が8割以上いる。また、「授業時間の確保」や「教員の指導力の不足」は、学校規模の大きい中学校ほど、校長の不安が高く、小規模校と大規模校との間に20ポイント以上の差があることがわかる。



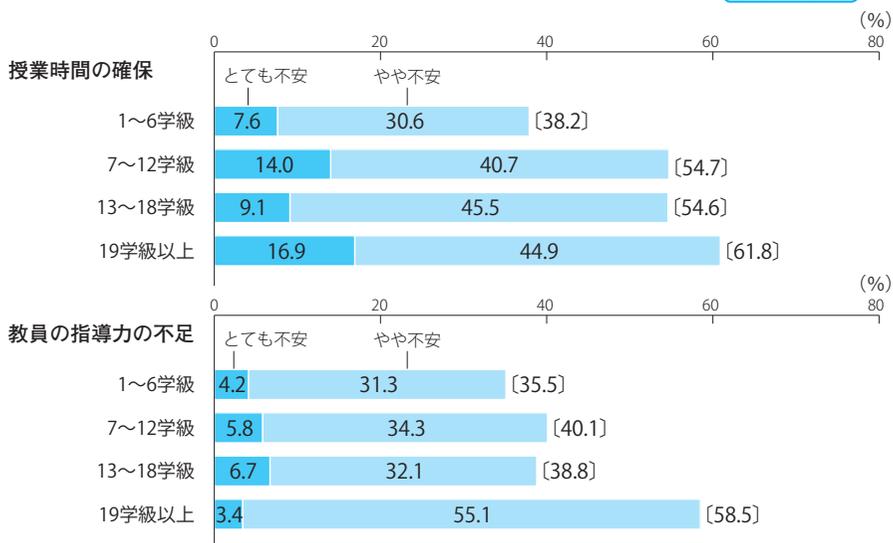
新学習指導要領の全面実施にあたり、次のことにどれくらい不安を感じますか。

図6-3 新学習指導要領の全面実施への不安（10年調査） **中学校校長**



※〔 〕は「とても不安」+「やや不安」の%。

図6-4 新学習指導要領の全面実施への不安（学校規模別、10年調査） **中学校校長**



※〔 〕内は「とても不安」+「やや不安」の%。

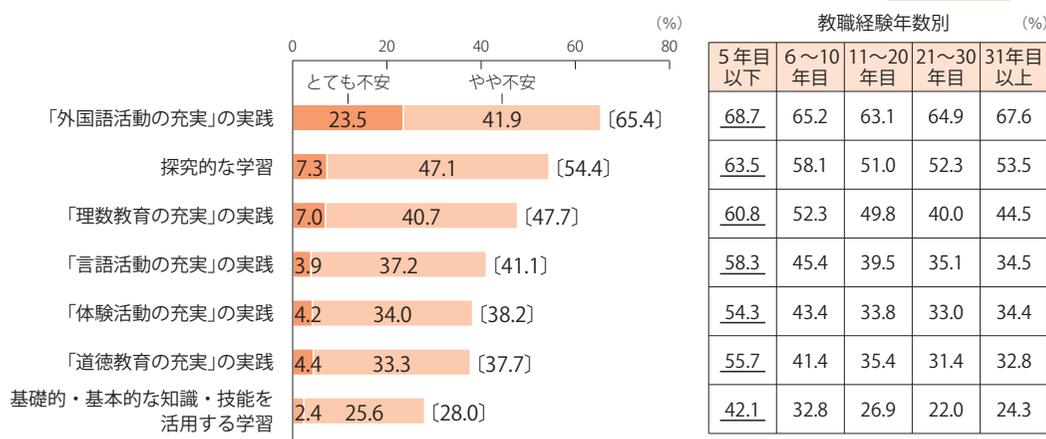
5割強の教員は、「探究的な学習」を「不安」と感じている

「基礎的・基本的な知識・技能を活用する学習」を不安視する小・中学校教員が2割～3割弱であるのに対し、「探究的な学習」は5割を超える。小学校では、「『外国語活動の充実』の実践」に対する教員の不安がもっとも高く(65.4%)、教職経験年数による大きな違いがみられないが、それ以外の項目は、教職経験年数が短いほど不安が高い傾向である。中学校は、どの項目も、若手教員のほうがベテラン教員に比べ、不安が高い。



2011年度から全面实施される新学習指導要領の以下の内容を行うにあたり、あなたはどれくらい不安を感じていますか。

図6-5 新学習指導要領の内容への不安(全体・教職経験年数別、10年調査) **小学校教員**



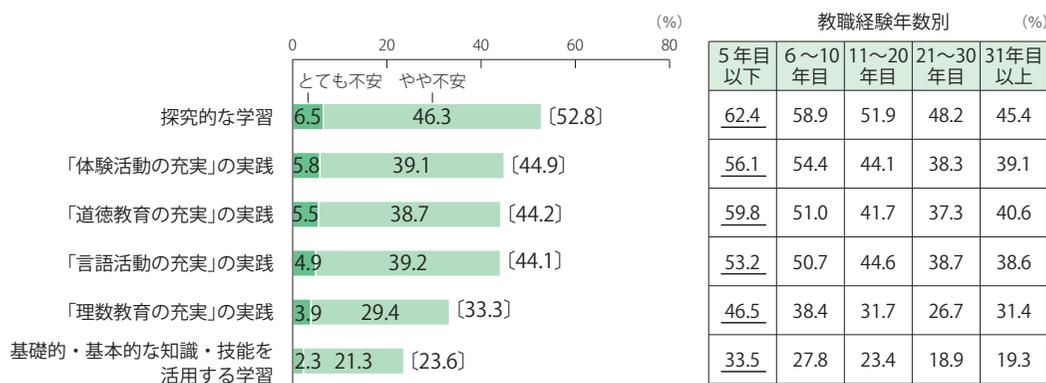
※〔 〕内、および右表の数値は、「とても不安」+「やや不安」の%。

※教職経験年数別の数値のうち、最大値に下線を引いている。



2012年度から全面实施される新学習指導要領の以下の内容を行うにあたり、あなたはどれくらい不安を感じていますか。

図6-6 新学習指導要領の内容への不安(全体・教職経験年数別、10年調査) **中学校教員**



※〔 〕内、および右表の数値は、「とても不安」+「やや不安」の%。

※教職経験年数別の数値のうち、最大値に下線を引いている。

6割の教員が、新学習指導要領の内容増に対して、「ポイントを絞って教える」と回答

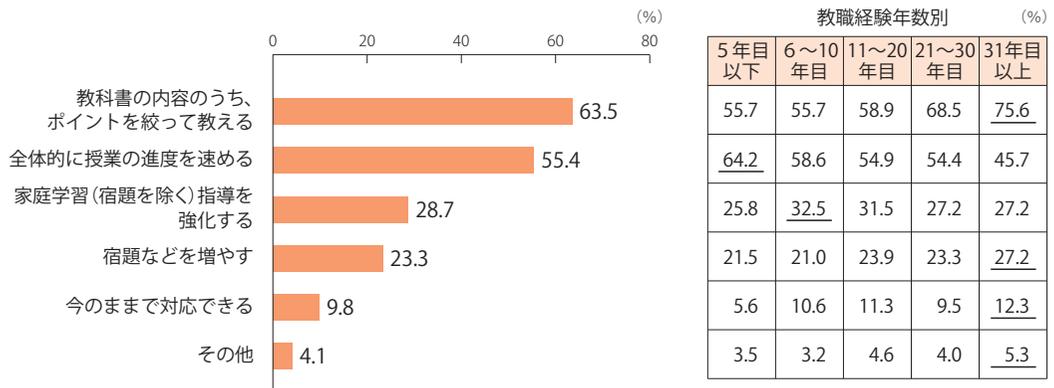
新学習指導要領の内容増への対応策としてTOP3にあがっているのは、小・中学校とも「教科書の内容のうち、ポイントを絞って教える」「全体的に授業の進度を速める」「家庭学習指導を強化する」である。小学校教員の回答を教職経験年数別にみると、ベテラン教員ほど、「ポイントを絞って教える」の比率が高く、若手教員ほど、「授業の進度を速める」の比率が高い。また中学校教員の回答を担当教科別にみると、担当教科により、対応策の違いがみられた。



新学習指導要領において学習内容が増加する教科について、あなたはどのように対応する予定ですか。

図6-7 新学習指導要領の内容増への対応予定

(全体・教職経験年数別、10年調査) **小学校教員**



※複数回答。

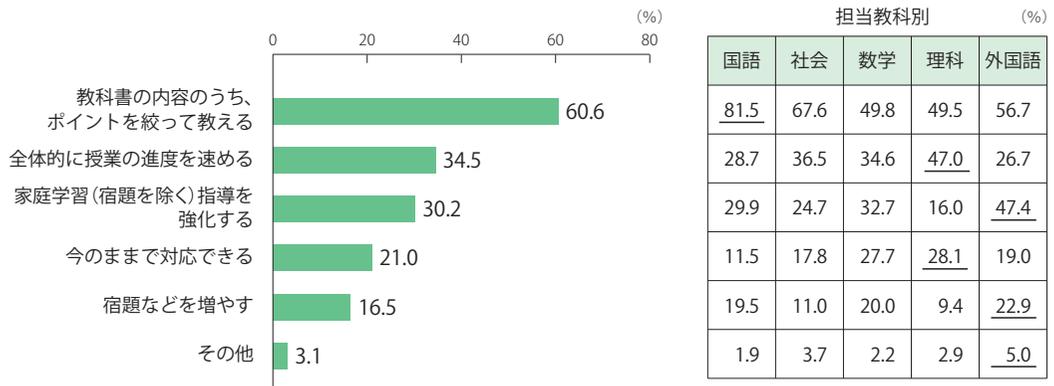
※教職経験年数別の数値のうち、最大値に下線を引いている。



新学習指導要領における学習内容の増加に、あなたはどのように対応する予定ですか。

図6-8 新学習指導要領の内容増への対応予定

(全体・担当教科別、10年調査) **中学校教員**



※複数回答。

※担当教科別の数値のうち、最大値に下線を引いている。

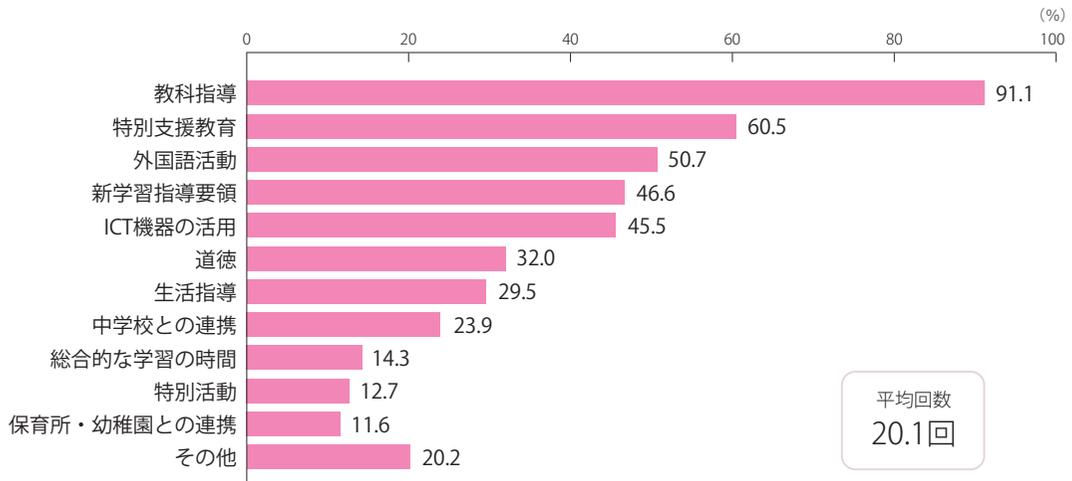
「新学習指導要領」に関する研修を行っている小学校は5割弱、中学校は3割強

校内研修の領域としては、「教科指導」（小学校約9割、中学校約8割）と合わせて、「特別支援教育」（小学校約6割、中学校約5割）が上位にあがっている。そのほか、小学校では、次年度の新学習指導要領の全面实施にむけて、「新学習指導要領」に関する研修が5割弱の学校で行われている。中学校では、「生徒指導」も約5割と高く、「新学習指導要領」は3割強である。



今年度、どのような領域について校内研修を行いますか（予定も含みます）。
今年度の校内研修の回数を教えてください（予定も含みます）。

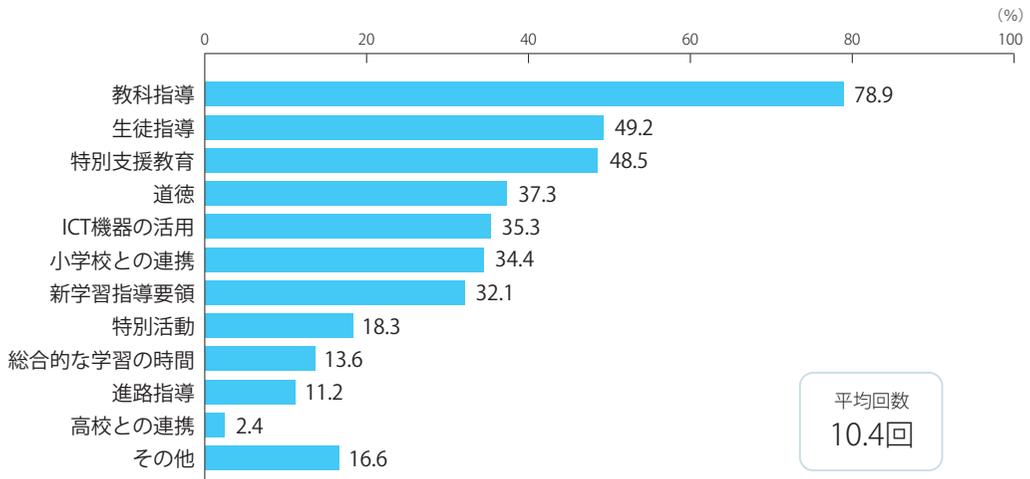
図6-9 今年度の校内研修の領域と回数（10年調査） **小学校 校長**



※複数回答。

※平均回数は、無回答・不明を除いて算出した。

図6-10 今年度の校内研修の領域と回数（10年調査） **中学校 校長**



※複数回答。

※平均回数は、無回答・不明を除いて算出した。

教材準備の時間の不足など、日々の忙しさが悩みの上位

小・中学校教員ともに、「教材準備の時間が十分にとれない」「作成しなければならない事務書類が多い」「休日出勤や残業が多い」など日々の忙しさに関する悩みが上位にあがっている。また、中学校教員は、「学習内容が定着していない」「学習意欲が低い」など生徒に関する悩みも比率が高い。

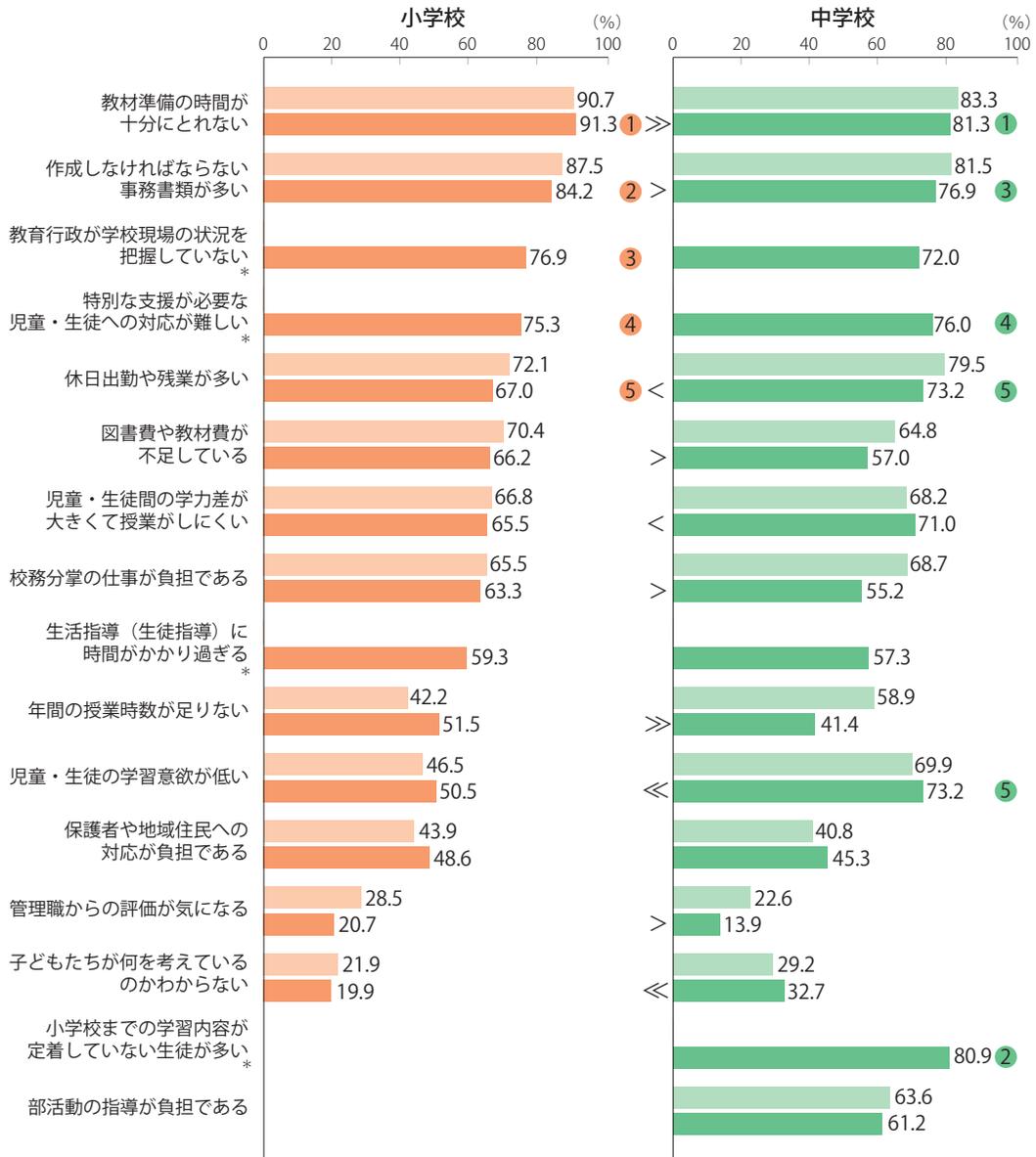


あなたは、次のような悩みをどれくらい感じていますか。

図7-1 教員の悩み（学校段階別、経年比較）

小学校教員 中学校教員

07年調査 10年調査



※「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

※*印は、10年調査より新たに追加した項目。

※小・中学校のそれぞれ上位5位までを①～⑤、①～⑤と表示している。

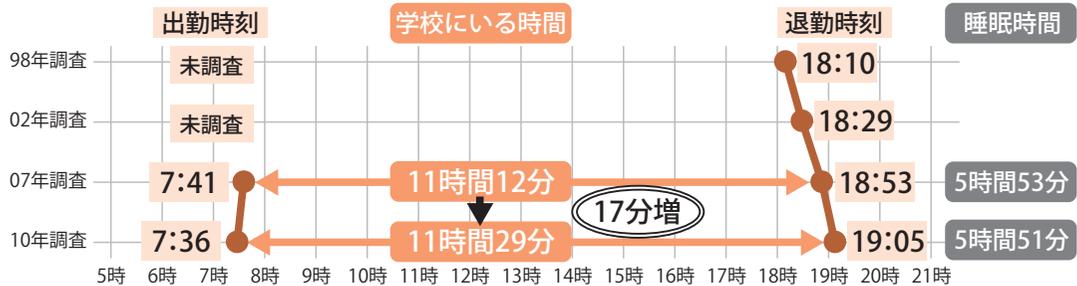
※<>は10年調査の小学校教員と中学校教員の数値に5ポイント以上差があるもの、<<>>は10ポイント以上差があるもの。

平日、学校にいる時間は約11時間30分、 家での仕事時間は依然長いものの減少傾向

小学校教員が学校にいる時間は07年調査に比べ17分長くなっている（11時間29分）。その一方、家での仕事時間は約8分減少している（67.9分）。土日の平均出勤日数は1.7日で、教職経験年数が短いほど出勤日数が多い。

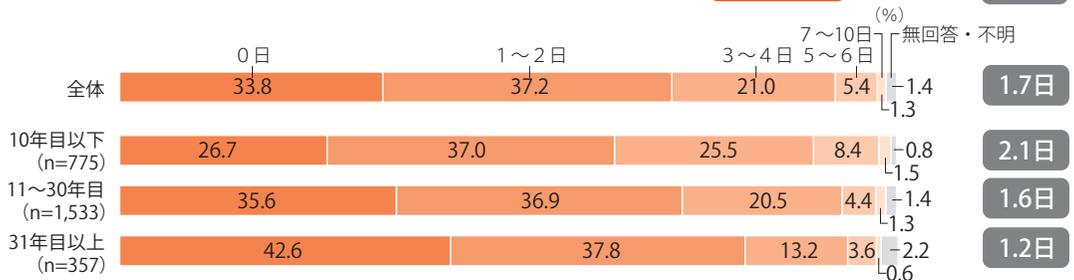
Q 授業がある平均的な1日についてうかがいます。

図8-1 出勤時刻・退勤時刻・学校にいる時間・睡眠時間（平均時間、経年比較） **小学校教員**



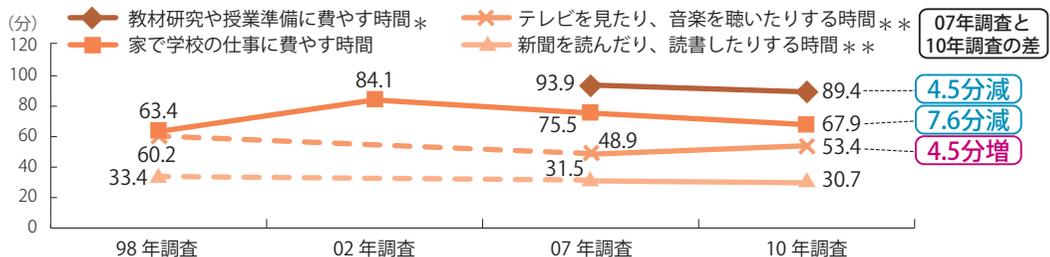
Q あなたは、土曜日または日曜日に出勤すること（学校行事を除く）が1か月あたり何日くらいありますか。

図8-2 土日の出勤日数（全体・教職経験年数別、10年調査） **小学校教員**



Q 授業がある平均的な1日についてうかがいます。

図8-3 平日の生活時間（平均時間、経年比較） **小学校教員**



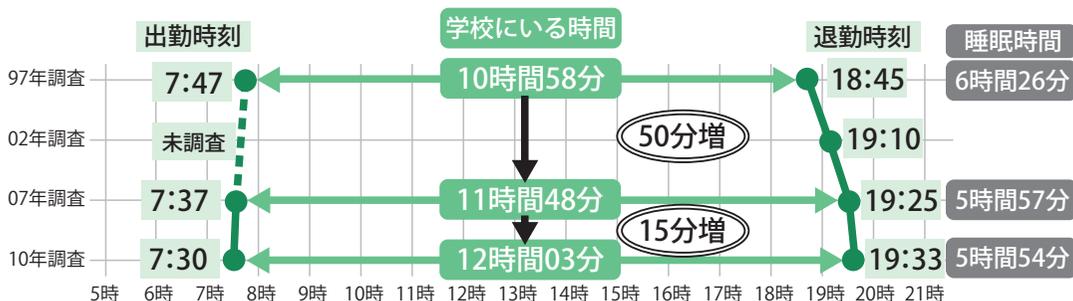
※07年調査の「出勤時刻」は、「学校には、始業時刻の何分前に着きますか」への回答を、「始業5分前」を5分前、「それ以上前」を75分前のように置き換えて、無回答・不明を除いて平均を出し、8時15分を始業時刻と仮定して算出した（『教員勤務実態調査（小・中学校）報告書』2007参照）。10年調査の「出勤時刻」は、「出勤時刻は、だいたい午前何時ごろですか」への回答を、「6時以前」を5時30分、「8時半以降」を8時30分のように置き換えて、無回答・不明を除いて平均を算出した（図8-1、図8-4）。
 ※「退勤時刻」は「5時以前」を4時30分、「10時以降」を10時のように、「睡眠時間」は「4時間以内」を4時間、「9時間以上」を9時間のように置き換えて、無回答・不明を除いて平均を算出した。「学校にいる時間」は、出勤時刻の平均から退勤時刻の平均までの時間を計算したもの（図8-1、図8-4）。

平日、学校にいる時間は約12時間、 週末の出勤は1か月平均4.5日におよぶ

中学校教員が学校にいる時間は07年調査に比べ15分長くなり、およそ12時間である。その一方、家での仕事時間は約7分減少している（54.9分）。土日の平均出勤日数は4.5日で、運動部顧問の場合、5.1日におよぶ。

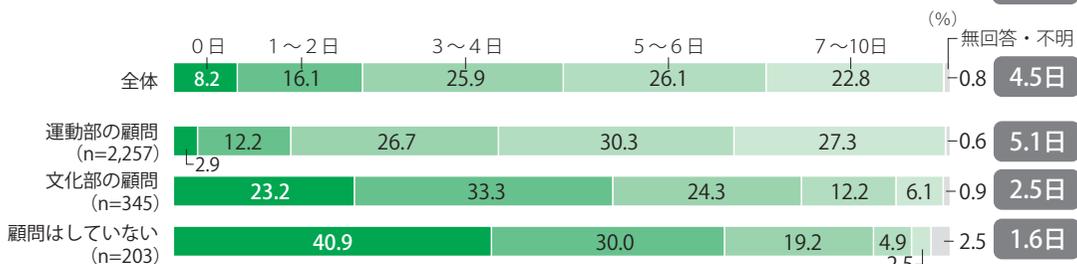
Q 授業がある平均的な1日についてうかがいます。

図8-4 出勤時刻・退勤時刻・学校にいる時間・睡眠時間（平均時間、経年比較） **中学校教員**



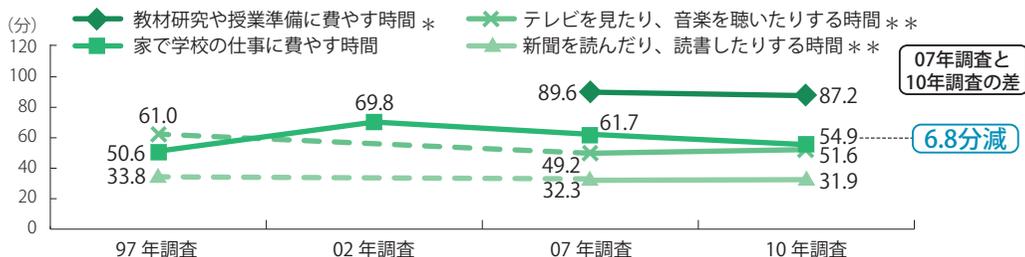
Q あなたは、土曜日または日曜日出勤すること（部活動は含む、学校行事を除く）が1か月あたり何日くらいありますか。

図8-5 土日の出勤日数（全体・担当している部活動別、10年調査） **中学校教員**



Q 授業がある平均的な1日についてうかがいます。

図8-6 平日の生活時間（平均時間、経年比較） **中学校教員**



※「家で学校の仕事に費やす時間」「新聞を読んだり、読書したりする時間」「テレビを見たり、音楽を聴いたりする時間」「教材研究や授業準備に費やす時間（学校と家で行う時間の合計）」は、「ほとんどしない」を0分、「3時間以上」を180分のように置き換えて、無回答・不明を除いて平均を算出した（図8-3、図8-6）。

※*印は、小学校の98年調査、02年調査、中学校の97年調査、02年調査でたずねていない項目。**印は、小・中学校の02年調査でたずねていない項目（図8-3、図8-6）。

9割の教員は子どもと「喜怒哀楽をともにできる」 「ともに成長できる」と回答

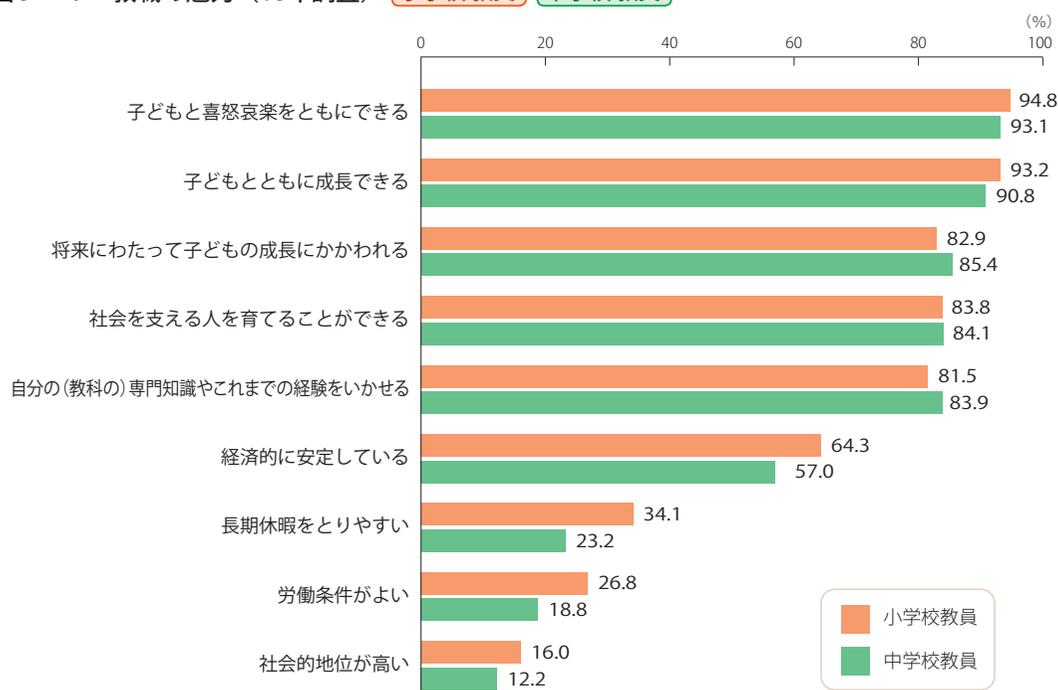
教職の魅力について、子どもとのかかわり、教職の社会的な意味、専門性に関する項目では、小・中学校教員とも、8～9割が「そう思う」「とてもそう思う」+「まあそう思う」と回答している。一方、「労働条件がよい」「社会的地位が高い」は、1～2割台の回答にとどまっている。

小・中学校教員の回答を比較すると、教科担任制ということもあってか、「自分の（教科の）専門知識やこれまでの経験をいかせる」の回答は中学校教員のほうが若干高い。一方、経済的安定、労働条件、社会的地位といった待遇面では、中学校教員の回答比率が小学校教員に比べて低い。小学校教員よりさらに多忙であることが影響している可能性がある。



あなたは教職のどこに魅力を感じますか。

図9-1 教職の魅力（10年調査） 小学校教員 中学校教員



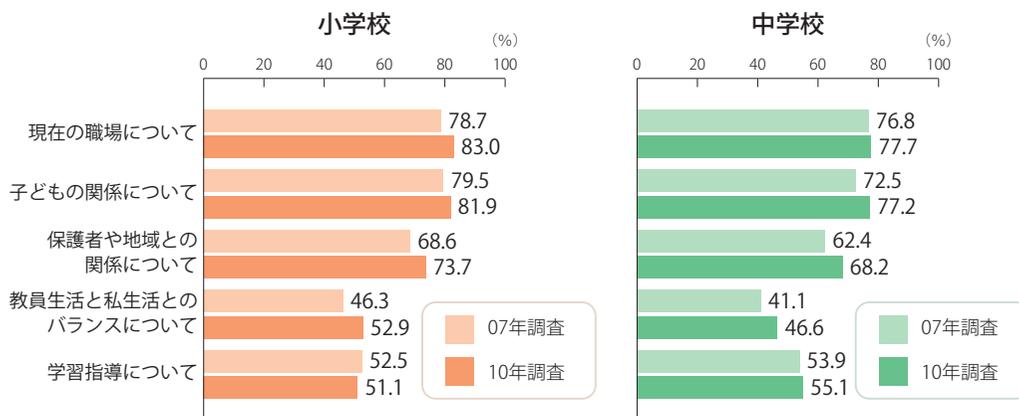
※「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

07年調査に比べ、教員生活への満足度が高まっている

小・中学校教員とも、「保護者や地域との関係」「教員生活と私生活とのバランス」など、07年調査に比べて、教員としての満足度が高まっている。また、教員生活の総合満足度も、小・中学校教員とも07年調査に比べて5～6ポイント増加し、8割弱（「とても満足している」＋「まあ満足している」）と高くなっている。

Q 教員として、次のようなことにどれくらい満足していますか。

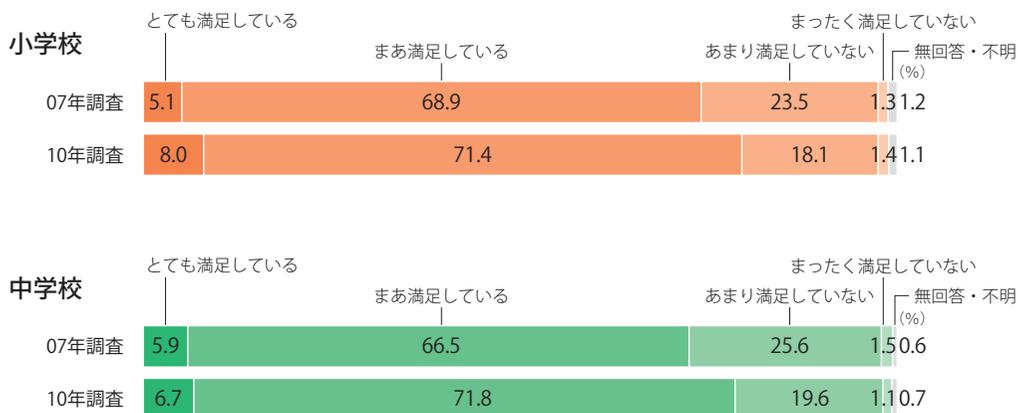
図10-1 教員としての満足度（学校段階別、経年比較） 小学校 教員 中学校 教員



※「とても満足している」＋「まあ満足している」の%。

Q 総合的にみて、あなたご自身の教員生活に、どれくらい満足していますか。

図10-2 教員生活の総合満足度（学校段階別、経年比較） 小学校 教員 中学校 教員



調査企画・分析メンバー

耳塚 寛明	お茶の水女子大学教授
樋田 大二郎	青山学院大学教授
子安 潤	愛知教育大学教授
西島 央	首都大学東京准教授
山田 哲也	一橋大学准教授
宮下 彰	東京都中野区立第九中学校校長
久保島 昌一	埼玉県立不動岡高等学校教頭
今関 和子	元東京都公立小学校教諭、千葉大学教育学部非常勤講師
邵 勤風	Benesse教育研究開発センター教育調査課長
橋本 尚美	Benesse教育研究開発センター研究員
岡部 悟志	Benesse教育研究開発センター研究員
鈴木 尚子	Benesse教育研究開発センター研究員
宮本 幸子	Benesse教育研究開発センター研究員
佐藤 昭宏	Benesse教育研究開発センター研究員

※所属・肩書きは、刊行時のものです。

Benesse® 教育研究開発センターのWEBサイトのご案内

Benesse® 教育研究開発センターで実施している各種調査の結果は、すべて以下のWEBサイトでご覧いただけます。

<http://benesse.jp/berd/>

こちらのサイトは で検索できます。